
灰色の魔術師

ナリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灰色の魔術師

【Nコード】

N1429X

【作者名】

ナリ

【あらすじ】

ある日起こった、第2王子の暗殺未遂事件。

新米魔術師のクロエはその犯人を追うが……

喰うか喰われるか、鬼畜な悪魔と少女のシビアな話。

* 公開設定に戻しました

恋の病 01 (前書き)

最後にイラストがあるのでご注意ください

恋の病 01

「おはようございまーす」

職場である王国魔術師団・第3隊研究室（兼、執務室）に着くと、私は元気よく挨拶をして木の扉を押し開けた。

しかし、朝早いこの時間、中には誰もいない。朝早いと言えど、一応勤務時間5分前なだけ……まあ、いつものこと。魔術師には夜型な奴が多いから、1時間2時間遅刻は当たり前なのだ。

かく言う私も朝は苦手なのだが、1番に来て掃除をしておかないと上司に怒られるから仕方なく早起きしている。

「きつたないなー。昨日も掃除したのに、1日で何でこんなに汚れるの？」

そこそこ広い部屋に、木製の大きな机と椅子が乱雑に並べられている。みんな壁際がいいとか窓の近くがいいとか言っつて、自分の好きなように机を動かしてしまっつからだ。魔術師には自己中な奴も多い。

目の前の机の上には山積みになった資料や魔術書が置いてあり、奥の机には薬の入った瓶や調合に使ったであろう汚れたガラス容器などが散乱している。そしてふと右に目をやれば、正体の分からない紫の液体が板張りの床へとこぼれ落ちていた。

清潔に保たれているのは、私の机だけ。

深いため息をつき、ぞうきんを手取る。私がやらなきゃ誰もやらないんだからと覚悟を決め、作業に邪魔なローブを脱いだ時だった。

ギイと音をたてて、背後で扉が開く。

入ってきたのは、私の所属する第3隊の隊長だった。立派な口ひげをたくわえた中年の男で、私が今脱いだものと同じ黒いローブを着ている。背中と左胸にこの国の紋章のついた、魔術師団の制服のようなものだ。

「あれ？ 今日はお早いですね、隊長。何かありましたか？」

隊長はすでに一仕事済ませてきたかのような、少し疲れた顔をしていた。

「何かありましたか、も何も」

『馬鹿と話すのは疲れる』と言いたげな口調。ここの魔術師たちのこんな態度にも、もう慣れた。

この国では、強い魔力を持っているのは貴族だけなのだ。庶民でも魔力を持つ者は多いが、魔術師になれるほどの力を持つ者は極めて稀。

で、その稀なのが私な訳だけれど、気高い貴族の皆様は、庶民と一緒に仕事をするのがお嫌なご様子。

17で入団試験に合格し、仕事を始めて半年が経つけれど、貴族の同期と比べて、あからさまに差別されることが多い。毎日の掃除だって私1人に押し付けられている。

……まあ、なんだかんだ言っただけ、最近ではこの研究室を美しく磨き上げることに快感を感じちゃってるんだけども。

隊長は続けた。

「大事件さ。おかげで私は夜も明けきらぬうちから呼び出されて寝不足だ。お前のような役立たずの下っ端がうらやましいよ」

さらつと付け加えられた嫌味を無視して、さらに問う。

「大事件？ 何があつたんです？」

「第2王子の暗殺未遂だ。昨夜、王子の寝室に何者かが侵入した」

「暗殺つ！？」

思わず声も高くなる。王子の暗殺だなんて……。

動揺しながら隊長につめ寄つた。

「それで？ 王子はご無事なんですよね」

隊長はうざつたそうに私を押しのけると、自分の机に向かい、引き出しを漁り始めた。

「もちろんだ。犯人は王子が目を覚まされると、すぐに逃げたらしいからな。しかし警備の騎士が2人殺された」

「……。犯人の特徴は？」

「さあな。王子は暗くてよく見えなかつたそうだ。ただ、1人だけだつたということは分かっている。おそらく単独犯だろう」

単独犯……

隊長の言つた単語に違和感を覚えた。だつて王や王子の寝室には、優秀な魔術師たちによって、それなりに強力な結界が施されているはず。

その結界を1人で破つたつていうの？ この国えり抜きの魔術師たちが施した結界を？

私の頭の中に、ひとつの可能性が浮かんだ。

「まさか……犯人は”黒魔術師”ですか？」

恐る恐る聞くと、隊長もいつになく真面目な顔でうなづいた。

「おそろくな」

思わず息をのむ。恐ろしい黒魔術師がこの国の王子を狙っている、という事実には。

普通、魔術師というのは、生まれ持った自分の魔力を使って術を操る。そういう者たちは俗に”白魔術師”と呼ばれ、この王国魔術師団の人たちも皆そうだ。

一方で”黒魔術師”というのは、悪魔の力を借りて術を操る邪悪な魔術師たちのこと。

基本的に悪魔の魔力は人間のものよりずっと強いので、黒魔術師が扱う術も、とうぜん白魔術師のものとは比べて強力になる。

悪魔と契約を結ぶ事は犯罪で、法で厳しく禁じられているが、力を求めて黒魔術師になろうとする者は後を絶たない。

「犯人は外部の者ですか？ それとも内部の？」

世界の中には、この国と敵対している国ももちろん存在する。だから暗殺者は外国の人間の可能性もある。

しかし王子の生死にはつねに権力争いも絡んでくるし、そうなる第2王子に生きていてもらっては困る、内部の人間の仕業ということも有り得るわけで……。

ひとり考えを巡らせている私に、引き出しの中から目当ての資料を見つけ出したらしい隊長は、

「そんなことお前は知らなくていい。役立たずは掃除でもしている」

と、冷たく言い放つと、そのまま研究室を出て行ってしまった。

部屋に残された私は、むうと眉間にしわを寄せながら、手に持ったぞうきんを握りしめた。

私のこと『役立たず』『役立たず』って言うけれど、今までここで魔術師として仕事をさせてもらった事なんてない。だから魔術師としての私の能力を、隊長は知らないはずなのだ。

だったら有能なのかと聞かれれば、自信を持って「うん」とは言えないけれども……。

だが少なくとも、掃除婦としての私は有能だ！

隊長への怒りで苛々としながらも、私は目の前の散らかった机を整理しにかかった。

薬草の入った大きなかごを持ち、研究棟の湿った廊下を歩いていると、王族が住む城の方から正午を告げる鐘が鳴り響いてきた。有事の際にすぐ駆けつけられるように、魔術師や騎士の詰め所は城のすぐ隣にあるのだ。

(王子、大丈夫かなあ)

窓から見える白亜の城を見つめながら、そんな事を思う。

犯人は警備の騎士を2人も殺した残酷な黒魔術師だ。目的を遂行するまで、きつと何度も王子を狙ってくるだろう。

”黒魔術師”という言葉を聞いたび、私の心はキリキリと痛む。幼い頃の血濡れた記憶が、鮮明によみがえってきて……。

知らず食いしばっていた歯の力を抜くと、私は第3隊の研究室に向かつて歩を進めた。他人の命を簡単に奪う黒魔術師のような存在

は、必ず根絶やしにしなければならぬ。そのために私は魔術師になつたのだから。

「クロエ、ちよつと来て」

かごを抱えて部屋に戻つた途端、横柄な口調で名前を呼ばれた。その声の主を見て、私は思いきり顔を歪ませる。

スザンナだ。

「聞こえないの？ 来てつて言つてるでしょ」

若草色のドレスの上にローブを羽織つた彼女は、多くの魔術師と同じく貴族であり、多くの魔術師と同じく庶民の私を見下していた。他の人は一応、表面上はその感情を隠してくれるのだが、彼女は決して隠そうとはしない。キンキンと響く高い声で命令し、私のことをメイドのように扱うから、あまり好きな相手ではない。

「何か用ですか？」

私は薬草の入つたかごを机に置くと、仕方なく彼女の元へ向かつた。栗色の巻き毛に、ぱつちりとした瞳。彼女は見た目だけなら可憐なお嬢様だ。

私より1年先輩の魔術師であるスザンナは、高飛車な笑みを浮かべながら、液体の入つた小瓶をこちらへ差し出してきた。

「何です？ これ」

言いながらも、何となく予想はついていた。今まで何度か、同じような液体を飲まされた事があるから。

そしてその予想は、やっぱり当たっていたらしい。

「魔法薬よ。前にも飲ませたでしょ。あの時は失敗だったけど、今度はきつと上手く出来たから飲んでみて」

スザンナに薬を押し付けられ、しょうがなく受け取る。今、私の眉間には、恐ろしく深いしわが刻まれていることだろう。

この液体の正体は、飲めばねずみに変身できる魔法薬なのだ。

しかし私は決して、ねずみになりたいなどと思ったことはない。

スザンナが勝手に作って、私に実験台の役目を押し付けているだけのこと。

(飲みたくない)

前に飲んだ失敗作では、体が毛むくじやらになったり、しつぽが生えたり、出っ歯になったりと、ろくな事がなかった。今回だってきつとそうだろう。動物変化の魔法薬は作るのが難しいのだ。

しかしここで断ると、私への粘着がさらにひどくなるだろうし……。

「早く飲んでよ!」

スザンナが追い立てる。彼女は自分のストレス解消のために、私をいびつているように思える。だが、面と向かって「やめて」と言えない庶民の弱さよ。

この魔法薬を摂取しても死ぬ事はない……はず。

私は覚悟を決めると、小瓶に入った黄土色の液体をグツとあおつた。

「うっ……」

瞬間、そのまずさに吐きそうになる。

が、それを堪えて全てを飲み込むと、今度は強烈なめまいが私の体を襲った。ぐるぐると回る視界に思わず目をつぶると、途端に平衡感覚を失う。

ぐらりと上半身が揺れ、そのまま床に倒れ込んだ。

「？」

あれ？

派手に倒れたはずなのに、いつまでたってもやってこない衝撃に、私は恐る恐る目を開けた。

「……うん？」

見える景色がおかしい。

目の前には大きな茶色いブーツ。私はそのブーツの先を視線で辿り、顔を上げた。と同時に、「ぎゃあ」と叫び声を上げる。

そこにいたのは巨人スザンナ。どうやら今回の魔法薬作りは成功してしまっただけらしい。

つまり、私はねずみになってしまったのだ。

4足歩行に変わった自分の体を確認すれば、小さな胴体をくすんだ灰色の毛皮が覆っている。よりによってドブねずみ……

軽い絶望を味わっている私の耳に、スザンナの高笑いが聞こえてきた。涙を流しながら、汚いねずみになった私を笑う。

「あはは、よく似合ってるわよ、クロエ！ 最高！」

「笑ってないで、早く戻してくださいよ！」

人間の言葉を喋れたことが唯一の救いだ。私は上半身を持ち上げ

て、遙か遠くにあるスザンナの顔を睨みつけた。彼女はこうやって私をあざ笑うただけに、この数週間、魔法薬の研究に取り組んできたのだらう。ご苦労なことだ。

「早く戻せ」と訴える私にスザンナが言ったことは、

「まだダメよ。薬の効果がどれだけ持続するか、あなたの体で試してちょうだい」

という無情な言葉。

私は声を荒げた。

「嫌ですよ！ 何時間も戻らないかもしれないのに」

「知らない。他の人に見つかって駆除されないように、せいぜい気をつければ？」

スザンナは楽しそうにそう言うと、自分の机に座って鏡を出し、化粧を整え始めた。これ以上頼んでも、彼女は私を元に戻してはくれないだらう。

後ろを向いているスザンナに向かって小さな舌をべえと出すと、私は扉の隙間から部屋の外へと飛び出した。4本の手足をちよこまかと動かしながら研究棟を出て、ひと気の無さそうな裏庭へと向かう。

この事態を打開するためには、『彼』の力が必要だと思ったのだ。
強大な魔力を持つ彼の力が。

「こんな真つ昼間に、ねずみが散歩か？」

しかし、『彼』を呼び出す前に、思いがけず別の人間に捕まって

しまった。

細いしっぽをつままれて、逆さに体を持ち上げられる。

「しかも魔力を持ったねずみだ」

暴れる私に、疑いの眼差しを向けてくる人物。

陽光を受けてキラキラと輝く金髪に、薄いブルーの瞳。上等な外套を羽織ったその人は……

「エリク王子!？」

こぼれ落ちんばかりに目を見開き、かの人の名を叫んだ。

「怪しい奴だ。ねずみに化けて、こんなところで何をしている。まさかお前が、今日俺の寝所を襲った黒魔術師か？」

とんでもない疑いをかけられた私は、間近で見るエリク第2王子の端正なお顔に見とれながらも、「違います」「誤解です」と、必死に首を振ったのである。

恋の病 02

「誤解ですよ！」

しつぽをつままれ逆さになったまま、私は叫んだ。

「私、魔術師団・第3隊所属のクロエです。前に、エリク王子とお話させて頂いた事もあります」

「第3隊のクロエ……？」

王子はねずみの私を持ち上げたまま「クロエ……クロエ……」と記憶を辿っている。

そして数秒後。

「ああ、あの庶民の」

「そうです、あの庶民のクロエです！」

庶民で良かったと、この時ほど強く思った事はない。

話をした事があると言っても1回だけだったのだが、貴族の多い魔術師団の中で私の存在は珍しく、記憶に残りやすかったのだろう。

「で、そのクロエが何でねずみになっているんだ？」

そう問う王子にせつせつと事情を説明すると、「大変だなあ」と同情してくださった。

「大変なのはあなたですよ。犯人の目星はついてるんですか？」

「いや、全然」

さらつと言って首を横に振るエリク王子。彼は王族だというのに、私みたいな庶民とも気軽に会話を交わす。

もちろん私だけではなく、貴族にも使用人にも、老人にも子供にも、魔術師にも騎士にも、誰にでも優しく平等。それゆえ、国民からの人気も高い。

だからこそ、こんな素敵なエリク王子が誰かに命を狙われているなんて、と思ってしまう。

「誰かに恨まれている、ということとは？」

私のぶしつけな質問にも、王子はちゃんと答えてくれた。

「いや、分からない。自分で言うのもなんだが、俺って誰からも愛されるタイプなんだ。兄上と違って、人付き合い上手いし」

第1王子のサーディル様は誠実で寡黙、統率力があり頼れる存在だが、確かに少しぶっきらぼうで近寄りがたい感じがする。しかし未来の王としては、それくらいの方がいいのだろう。多少、威圧感のある方が。

一方で第2王子のエリク様は明るくて口がうまく、少しいいかげんなところはあるが、本人が言うように何故か皆から愛されるような、そんな存在だ。

「サーディル王子との仲も良好ですよ。権力争いなどもなく」

私は小さな黒い目を王子に向けた。

エリク王子はうなづく。

「ああ。俺は王の座になんて興味はないし、兄上との仲も良い」

「うーん、そうなるとますます犯人の動機が分かりませんね。エリ

ク王子を狙って得する人なんていないんですもん。敵国の刺客だとしても、王やサーディル王子を狙うでしょうし」

と、ぐたぐた考えているところで、ふと気がついた。

「そういえば王子、おひとりで何をされているんです！ 護衛の方は？」

「暑苦しいから、まいてきた」

その答えを聞いて、私はふらりと倒れそうになった。王子にしばつままれたままだから、倒れられないんだけど。というか、そろそろ離してもらわないと、頭に血が……。

「たくさん護衛に囲まれて息が詰まるのは分かりますが、きっとみんな心配してますよ。早く戻ってあげてください」

「そうだな。そろそろ戻るか」

エリク王子は素直にそう言つと、どこからか杖を取り出し、その先端を私に向けた。

《レドアンド・モーレ》

彼が短く詠唱すると、杖の先から放たれた淡い光が私の体を包み込む。

そして次の瞬間には、

「も、戻った……」

私は人間に戻っていた。

「ありがとうございます。助かりました。エリック王子も魔術をたしなまれるんですね」

「ああ、魔術も剣術も一応はな。どっちも中途半端だが……」

と、そこまで言った後、王子は急に動きを止めた。じつとこちらを見つめてくる。

こんなかつこいい人に直視されたら、花の乙女である私はドキドキと胸を高鳴らせる事しかできなくなるではないか。

王子は私の瞳を覗き込みながら無邪気に言った。

「真つ黒な瞳っていうのも魅力的だな。幼く見えて愛らしいというか……。薄い色の瞳は、冷たい感じがするんだよなあ」

「王子……」

私は呆れたように呟きながら、高鳴る心臓を落ち着かせた。王子は誰にでもこういう事を言うのだから。

しかし別に、王子が女たらしだと言っているわけではない。ただ彼は、素直に相手の良いところ、魅力的なところを口に出しているだけなのだ。

問題は、それをだれかれ構わずやるということ。

「王子、あなたのそういうところ素敵ですけど、気のない女性に向かつて『魅力的』だとか『愛らしい』とかいうもんじゃないですよ」「何でだ？ 俺は別に悪口を言っているわけじゃない。誰でも褒められると嬉しいだろう？」

きよとんとするエリック王子は、少年がそのまま成長したような感じだ。確か私より年上だったはずだが。

この人は天然タラシだから始末が悪い。一体今まで、何人の女性を泣かせてきたのか。

王子は『黒い瞳って魅力的』だと発言しただけだが、言われた相手は普通、ちよつと違う風に受け取るはず。『エリク王子は”私の”黒い瞳を魅力的だとおっしゃったわ！”私の”黒い瞳を！”ってな風に。』

エリク王子は、素で相手に勘違いさせるような行動、発言をしちやうんだよなあ。

私はため息をついた。

「自分で考えて下さい。……あ、お迎えが来ましたよ」

研究棟の向こうから、護衛の騎士の皆さんが慌ただしくやって来た。王子の姿を見つけて、ホツとしたような顔をしている。

私は、しつこく「何故だ」と聞いてくる王子の背を騎士の人たちがいる方に押すと、

「もう護衛の人たちをまいたりしないで下さいね。黒魔術師というのは邪悪で恐ろしい奴らばかりなんです。本当に危険なんですから」

真剣な声で言う。

数秒間の沈黙の後、エリク王子が片眉を上げた。

「過去に黒魔術師と会ったことがあるような言い方だな」

私はぎこちなく笑って、肩をすくめた。

「両親が殺されたんです」

「王子！ 探しましたよ！」

「こんな時におひとりで行動なさるなんて、何を考えていらっしやるんです」

小さく呟いた私の言葉は、王子を”捕獲”しに来た騎士たちの喧噪にかき消された。

しかし王子にはしつかりと聞こえていたみたい。何とも言えない表情をした後、「それは辛かったな」とこぼして、そのまま騎士たちに連行されていく。

(言わない方がよかったかな)

遠く離れていく王子を見送りながら、そう思った。優しいエリク王子には、言うべきではなかったのかも。情が厚いから、しばらく私の事を気にしてしまいそうだ。

しかし言わなければ言わないで、あらぬ疑惑を持たれそうだったし。

冷たくなった両親……破壊された村……

勝手に浮かび上がってきた血濡れの記憶を脳みその奥底へと沈めると、頭を振って気を取り直した。

今こそ、私は頑張らないといけない。

私は世に潜む黒魔術師を倒すために、魔術師になっただんだから。

けど隊長は、新人で庶民な私に仕事を回してはくれないだろうな。ましてや、王子暗殺未遂の犯人を追うなんて重要な仕事。

研究棟に入ると、廊下を進んで部屋へと戻る。

が、扉を開けた途端、仁王立ちして待ち構えていたスザンナに激しく睨みつけられた。

「？」

一体、何をそんなに怒っているのだろうと首をひねる。勝手にねずみから姿を戻した事？

誰か通訳してくれないかと部屋を見回してみるが、ほとんどの隊員は暗殺未遂事件のほうで出払っていて、残っているのは3人だけ。すなわち私とスザンナ。そしてダンという名の若い男だけなのだ。

「いい気にならないでよ」

蛇に睨まれた蛙のごとく、その場で立ちすくんでいた私に、スザンナが低い声を出した。

「エリク様はアンタの事なんて何とも思っていないんだから！」

そう叫ばれて初めて、先ほどの裏庭でのやり取りを見られていた事に気づく。

しかしもちろん、エリク王子が私の事を何とも思っていない事も分かっている。

「庶民のくせに、エリク様と話をするなんて」

憎々しげに言われた。

どうやらスザンナは、エリク王子の事が好きなようだ。それもすぐく。

そういえば、遠くにエリク王子の姿を見つけると、「私のエリク様……」とか言っていてうっとりしていた姿を何度か目撃している。ただ、うっとりしていたのはスザンナだけじゃなかったが。

”王子”という地位と甘いマスク、そしてその天然タラシ能力の効果で、エリク王子が嫌いな女性なんていないから。本当に罪な人だ。

「もう二度と、彼と話さないで！」
「そんな事言われても……」

スザンナの強い口調に、私はもごもごと反論した。

「この敷地内を歩いていれば、稀に王子にお会いする事もありますし……。向こうから話しかけられたら、無視する訳にはいきませんよ」

「口答えしないでっ！」

ヒステリックに叫ぶと、スザンナは机の上にあつた分厚い魔術書を手に取り、こちらに向かって投げつけてきた。

「わわっ！」

間一髪でそれを避けるも、スザンナの攻撃は止まらない。積み上がっていた魔術書を、上から順番にぶつけてくる。

「痛っ……！　ちよっ……待っ」

分厚いそれは立派な凶器だ。肩やお腹にガンガンと投げつけられ、私はなす術なくその場に座り込んだ。

「ほんとムカつく！　どうしてアンタみたいな汚い庶民がエリク様に話しかけてもらえるのよ！」

研究室にスザンナの金切り声と、私の体に本がぶつかる鈍い音が響き渡る。

『庶民』は本当のことだからいいけど、『汚い』と言われるのは嫌だな。　なんて事が考えられるほどの余裕も、しかし次の瞬間に

は無くなった。

怒りで顔を真っ赤にしたスザンナが、机の上に置いてあった透明なフラスコ瓶に手を掛けたからだ。

「ま、待って、スザンナ！ 落ちつ」

身の危険を感じた私は、魔術でシールドを張ろうと、太ももにつけていたホルダーへ咄嗟に手を伸ばした。そこに杖を差していたから。

しかしこの場合、さっさと体を起こして逃げるか、腕で顔を守つたほうがよかつたのかもしれない。

杖をとるも防御は間に合わず。あらん限りの力で投げつけられたフラスコ瓶は、ノーガートだった私の額へとブチ当たってしまった。

「……っ！」

瞬間走った鋭い痛み。

私の石頭があだになつたらしく、当たった刹那にフラスコ瓶は砕けたのだ。額の皮膚が切れ、とろりと流れ出た血が右目をふさぐ。

粉々に割れたガラスが、カラカラと高い音をたてて床に落ちた。

額からの血が顎までつたい、ポタポタと床に染みをつくっていく。これだけ派手に流血したら、普通、攻撃を加えた方は「やりすぎた」と正気に戻るはずじゃないだろうか。

しかし、痛みに顔をしかめている私に向かって、スザンナは尚も追撃の手を休めない。今度は杖を持ち出して、長い呪文を唱え始めた。

彼女は嫉妬に捕われて、我を失っているように見えた。目が完全にイっている。しかも今唱えているのは、それなりに強力な攻撃呪文。ちゃんと発動すれば、私ごとこの部屋が吹っ飛ぶほどの威力が

出るはず。

私がちよつとエリク王子と話したからといって、いくらなんでも嫉妬し過ぎだ。恋する乙女の暴走は恐ろしい。

「スザンナ、落ち着くんだ」

と、そこで彼女を止めてくれたのは、部屋に残っていたもう1人ダンだった。不細工でもなければ美しくもない顔に、低くもなければ高くもない身長、少し地味めな青年。

彼も貴族で普段私には冷たいのだが、とうかほとんど興味が無いようで、話しかけられたこともない。さすがにこれはやばいと思ったようだ。杖を掲げているスザンナの手をがっちりと掴んで、「もうやめておけ」と説得している。できればもう少し早く助けに入って頂けると、非常にありがたかったのだが。

いさめられたスザンナは、憎悪のこもった瞳できつくこちらを睨みつけた後、「フン！」と鼻を鳴らして部屋を出て行ってしまった。私はまだ誰かを好きになったことはないけれど、恋をしたら皆あんな風になってしまうのだろうか。意中の相手を想うあまり、嫉妬して、憎んで、攻撃して。

（いや、まさか）

自分の疑問を自分で否定した。スザンナはちよつと、いき過ぎて

「大丈夫かい？」

2人残った部屋の中、ダンが私に声を掛けてきた。それに「いや、大丈夫じゃない」と答えると、彼は杖を持ってこちらに近づいてき

て、

《ア・デナレオ》

呪文を唱えた。

途端に患部が温かくなつて、じんじんとした痛みが消えていく。どうやら、額の傷を治してくれたみたい。

意外と良いところあるなと見直した。普段そうでもない人に親切にされると、相手がすごく優しい人に見えてくる不思議。

「隣の材料庫に新品のガーゼがあったから、顔拭いておきなよ」

しかしダンはそう言うのと、何事も無かったかのように自分の机に座り、仕事に戻った。片目のふさがった私の代わりに、ガーゼを取ってきてくれる優しさはないらしい。

だが、まあ、怪我を治してくれただけありがたい。私はゆっくりと立ち上がると、血に濡れた右のまぶたを閉じたまま廊下に出て、隣の材料庫へと向かった。材料庫と言っても、空き部屋を利用した、ただの物置なのだけだ。

汚れた木の扉を開けて、物置の中へと入っていく。

しかし、ふと窓際に目をやったところで、この部屋にいるもう一人の人物に気がついた。

「あ……」

宙に浮かび、見えない椅子に座って足を組んでいる男。

完璧に整った顔に陶器のような白い肌。頭には渦を巻く角があつて、濃い金色の髪は窓からの日差しを受けて艶めいていた。そしてその真紅の瞳は、まるで呪われた宝石のように妖しい色気を宿して

いる。

人間離れたした美しさを持つその男は、私の血まみれの顔を見て愉快そうに口元をゆるめ、こう言った。

「おいで。傷を見せてごらん」

恋の病 03

「傷はもう治してもらったから大丈夫」

私は宙に浮かぶ金髪の男　ミカリエに向かって、親しげに話しかけた。

ミカは唇の片端をつり上げると、含みを持った口調で言う。

「そう。お前がいいのなら、私もそれでいいよ。お前がいいのならね」

「何……?」

彼の楽しそうな顔を見て不安になった。過去の経験から言うと、ミカがそういう顔をしている時は、何か私にとって楽しくない事が起きている時だからだ。

そろそろと窓際に近づいていくと、宙に浮いていたミカは、ふわりと床に降り立った。彼が動くとき、魅惑的な甘い香りが辺りに広がる。

「何なの?」

血に覆われていない左目で、背の高いミカをキッと睨みつけた。彼相手に弱気でいくと、どんどん足元をすくわれるから。

ミカはその整った顔に恐ろしく綺麗なほほ笑みを浮かべると、何も無い空間から、突然鏡を取り出した。金の装飾が施された高そうなもの。ミカは何も言わず、その鏡を私の顔に向けた。

「うわ、すごい血　って……ん?」

顔の右半分を覆う血の量に一瞬驚いたが、その後、傷があったであろう額に目をやって私は硬直する。

ダンは確かに、傷を治してくれていた。皮膚は塞がり、血は止まっているから。しかし

「何これ？」

思わず、眉間にしわを寄せる。

なぜなら私の額に、小さな出っ張りがあったからだ。まん丸ではなく、少し角張っている。

何でいきなりこんなものが出来たのかと思ったが、しかし考えてみれば思い当たる節があった。

「砕けたフラスコのガラス……」

おそらく、私の額の傷には小さなガラス片が刺さっていたのだろう。で、それを取り除く事なく、ダンが傷を治した。血で見えなかったのか、はたまた私なんかの傷にはそれほど注意を払っていなかったのかは分からないが、結果、皮膚がガラスを覆ってくっついてしまっ……

「最悪」

思わず悪態をつく。埋まったガラス片を取り除くには、くっついた皮膚をもう1度切らなければならぬ。2度も痛い思いをしなければならぬなんて。

これなら最初から自分でやった方がよかった。

今日は厄日だ。

泣きそうになりつつポケットから小型の折りたたみナイフを取り

出して、その刃を消毒しようとした時だった。

突如こちらへ伸びてきたミカの手に顎をつかまれ、くいと上を向かされる。ガラスの埋まった私の額に、彼の細長い指が近づき……そしてすぐに去っていった。

しかし彼が何をしてくれたのか、私には分かる。呪文の詠唱も杖も無かったけれど、ミカは魔術を使ったのだ。カラン、と軽い音をたてて床に落ちたガラス片が、それを証明している。

もう1度鏡を覗き込むと、血に濡れてはいるものの、傷痕も出っ張りもない綺麗な肌を確認する事ができた。

「ありがとう」

ガラスを取り除いてくれたミカにお礼を言うと、彼の妖艶な笑みは、より深くなった。

それにしてもすごい。皮膚を切る事もなく、私に痛みを感じさせる事もなく、埋まったガラス片を一瞬で取り出し、肌をきれいに治すなんて。

「どうやったの？」

一応魔術師の端くれである私としては、興味を持たずにいられない。

ミカは低くなめらかな声で答えた。

「患部の神経を麻痺させてからガラスの欠片を空間移動で取り出し、治癒をしただけ」

何でもないことのように言っけれど、それはかなり難しいことだ。神経をいじるには、かなり緻密な魔力のコントロールを要求される

し、ガラス片を転移させる空間移動術も簡単な技ではない。しかもそれを杖なし、呪文なしでやるのだから。

ミカの力の凄まじさは、もう十分わかっているつもりだったけれど、やはり見るたび驚いてしまう。

彼にとつて魔術を使うということは、呼吸するのと同じくらい簡単なこと。魔力の量も膨大で、人間にとつては難しい術や不可能な術でも、なんなくやってのける。なぜならミカは

「クロエ」

と、その時。

背後で静かに扉が開いた。

顔をのぞかせ、私に声を掛けてきたのはダンだ。

彼が廊下を歩いてくる足音に気づけなかったので、ダンが扉を開けた瞬間、驚いて飛び上がりそうになった。

唯一開いている左目でダンを見た後、ミカのいた方にそわそわと視線を戻す。しかし私が心配するまでもなく、彼の姿はこの部屋からこつ然と消えていた。

密かに胸をなで下ろした後、もう1度ダンを見て質問する。

「どうかしましたか？」

「さっきのことだけど……スザンナに怪我させられたって、あまり周りに言わないでやってくれるかな。スーはちよつと興奮してしまっただけなんだ」

若干動揺している私の様子に気づくこともなく、ダンはたんとんと話した。

スザンナのことを『スー』と呼んだことが気になったけど、すぐに、そういえば2人は幼なじみだったと思い出す。スザンナとダンの実家は距離的にも身分的にも近く、仲が良いのだと聞いたことが

あるのだ。スザンナがうちの隊長に話していたのを、なんとなく聞いていただけだが。

「ええ、元から言いふらす気はありませんし」

「よかった。頼んだよ」

それだけ言うと、ダンはずぐに去って行ってしまった。怪我は治っているとはいえ、顔面の半分が血まみれの女子が目の前にいるのだから、もうちょっと気に掛けてくれてもいいんじゃないか？

そんな事を思いつつ窓の方を振り返ると、ダンが来る前にいた位置に、ダンが来る前と変わらない様子でミカが立っていた。

自分の姿しかり、何かを透明にする魔術も結構難しいはずなんだけどなあ。

「対価を」

うずたかく積み上げられた荷物の中からガーゼを探そうとした時、突然ミカがそう言って、手のひらを差し出してきた。

対価。それは私がミカに何かをしてもらうたび、必ず払わなければならぬもの。彼は、私の傷を治した対価を求めているのだろう。でも……

「さっきのは、親切でやってくれたんじゃないの？」

口をとがらせて言う。「治してくれ」と、私から頼んだわけではない。

しかしそんな理由では、彼は納得しないのだ。

ミカの薄い唇が、ゆるく弧を描いた。

「私に親切などというものがあると思っているの？」

そう言われたら、降参するしかない。ミカにそんなもの有りはしないのだから。

私は肩を落とすと、目の前の妖美な男に尋ねた。

「わかったよ。何が欲しいの？ またトリム酒でいい？」

ミカは大抵、対価にそれを望む。トリムという赤い果実から作られる高級酒を。

だが今回はトリム酒でなく、『ここ』にあるもので我慢してくれらしい。

ミカは音もなく私に近づくと、真っ赤な舌をぺろりと出して、

「今回はこれでいい」

と、私の頬をつたう血液を舐めた。

「血っておいしいの？」

わき上がった単純な疑問。ミカに顔を舐められながら質問すると、彼は喉の奥で低く笑った。

「お前のはね」

日暮れを告げる鐘が鳴る頃、私はひとり、とぼとぼと家路をたど

っていた。第2王子エリク様の暗殺未遂事件のことで、とうぜん城の警備は騎士・魔術師とわず増やされたわけだが、私はそれから外されたから。

エリク王子を守るため、憎き黒魔術師を倒すため、自ら「私も頑張ります！」と立候補してみたんだけど、「まだ新人のお前に、こんな大事は仕事は任せられない。城の備品を盗むかもしれんしな」と、隊長に……あのヒゲ親父に言われたのだ。奴の嫌味は日常茶飯事なため、大人な私は普通に無視をしてやった。いくら庶民出身の貧乏人でも、城のものを盗ったりはしないっつーの。

ちなみにスザンナの方も、私の事を完全無視することに決めたらしい。あの後から、一切話しかけてはこなかったから。

「ただいま」

一人暮らしの部屋には誰もいないのだけど、「ただいま」と言うのは習慣になってしまっている。

私が今住んでいるのは、城の近くにある女性用の寮だ。

騎士の場合は、貴族の者でも庶民の者でも、最初はみんな同じように寮で共同生活を送るのだという。そうやって信頼関係を作っていく、結束を固めるのだ。

しかし魔術師の場合は違う。数十人が一緒に戦うということは滅多にないので、協調性を養うための寮生活は強いられない。

なので私以外の魔術師たちは、馬車に乗って実家の屋敷から通っているものばかり。地方に住む者はわざわざ王都に別邸を買うものもいるし、貴族と言えども別邸を買う余裕のないものは、特別に許可を取り、転移の術を使ってやって来たりもする。

この寮も本来は女性騎士たちのためのものなのだが、部屋が余っていたので私も入れてもらったのだ。

私が育った実家も、村も、今はもう無いから。

すっかり日も落ち、辺りに濃紺の闇が広がると、私はそろりと寮を抜け出した。後ろにはミカもついて来ている。

彼はずっと私の側にいるわけではない。基本的に呼べば姿を現してくれるのだが、日中は一人で”散歩”しているらしい。どこへ行っているのかは分からないが、大体想像はつく。

小さな諍い^{いさか}であれ、どこかの国で起きている大きな戦争であれ、怒り、恐怖、悲しみ、嫉妬、人間の負の感情が集まるところに、彼らも集まるから。

《デアアトロ・レア・アグナーザル》

寮の裏手へやって来ると、辺りに人がいないのを確認してから、小さな声で呪文を唱えた。 持っていた杖を、自分の方に向けて詠唱が終わると同時に、私の体はゆっくりと透き通っていく。

その変化に、私は術の成功を確信したが、しかし完璧にはいかなかった。半透明になったところで、術の効力が失われてしまったからだ。これでは他人に見つかってしまう。幽霊だと思われるかも慣れない術だから、まだ練習が足りなかったみたい。それに自身に術をかけるのは、他人に術をかけるより難しいのだ。

私は諦めて、解除の呪文を唱える。すると半透明の体は、またゆっくりと鮮明になっていった。

「ミカ……」

困った表情でミカを見上げると、彼はこうなることを予想していたかのように口角を上げて笑い、私に向かって手のひらをかざした。そのすぐ後。

「もういいよ」

艶やかな声でミカが言う。闇をまとったミカは、その姿を見慣れている私でも、思わず見とれてしまうほど美しい。彼はよく、黒髪黒目の私のことをカラスの雛のようだと言ってからかうけれど、私がカラスならミカは孔雀だ。

「え？ 本当にこれで見えなくなってる？」

自分の体を見下ろして聞いた。他人から姿を隠すため、透明になる魔術をかけてもらったはずなのだけど、私の体は一向に透き通る様子がない。

「お前の姿も私の姿も、今は他人には見えていないよ」
「そうなんだ」

ミカがそういうのなら、そうなんだろう。彼の術は完璧だから。今までたくさんの魔術書を読んできたけれど、人間が使うものの中に、こんな術は存在しない。私やミカ、特定の者には姿が見えていないのに、その他の者には見えない術なんて。

普通、透明になる術といったら、自分にも自分の姿が見えなくなるものなのだ。

「対価を」

ミカから、お決まりのセリフを言われた。

「後でトリム酒あげるから」

顔をしかめながら答えると、ミカは目を細めて、それを了承した。

ミカがかけた術によって、私の姿は他人から見えなくなった。それと同時に声も聞こえなくなっているらしい。

が、地面を歩く足音や衣擦れの音は周りに聞こえてしまうと説明されたので、私は極力音を消して、そろりそろりと城へ向かった。私なんかエリク王子を守らなくても、他の人たちが警備をしっかりやってくれているのだが、犯人が黒魔術師である可能性が消えない以上、私も出しゃばらずにはいられない。

対黒魔術師の戦闘に関しては、私はきつと誰よりも経験を積んでいる。王国魔術師団に入る前から、ミカに協力してもらいつつ、密かに黒魔術師を倒してきたから。

そしてここ 王宮魔術師団に入団したのも、黒魔術師の情報が集まりやすいのではと思ったからだ。自分一人で情報を集めるのは限界がある。

「ここでいいかな」

王子を狙って、また今晚やってくるかもしれない暗殺者 黒魔術師を迎え撃つため、私は王城の敷地内、西門の側までやってきた。 昨晚、黒魔術師はここを通って、王子の寝室へ向かったはず。殺された騎士たちの遺体が、犯人が辿った足跡を示してくれたのだ。昨日ここで警備をしていた騎士は、2人とも亡くなっている。殺す必要があったのかは分からない。

犯人は人の命を軽んじているのだろう。黒魔術師とは、大体そういうもの。

私は音をたてないように気をつけながら西門の近くにある大きな木の幹によじ登り、その太い枝に腰掛けた。ミカはふわりと浮いて、私の隣に腰をおろす。

門の警備は通常2人なのだが、今日は4人いる。城の敷地内を見回っている騎士たちの姿も確認することができるが、もちろん向こうはこちらに気づいていない。

木の枝に座っている私とミカの姿は、本当に彼らには見えていないのだ。自分では自分の体がはつきりと見えるだけに、なんだか不思議な感じがする。

昨日の今日で、また犯人がやってくる可能性は低い。しかし犯人が一刻も早く王子を殺したがつているのなら、警備が強化されている事を分かっていても来るだろう。

自分の力に自信を持っているであろう黒魔術師なら、なおさら。しばらく私は、じっと黙って周囲に気をはらっていた。いつ姿を現すか分からない黒魔術師に備えて。

そうしてすっかり夜も更けた頃、それまで暇そうにしていたミカが突然口を開いた。

「いつまで続ける？」

その言葉の主語は、『この監視を』だろうと思った私は、前を向いたまま短く返す。

「もちろん、朝まで」

暗殺者とは、たいてい夜に動くものだ。犯人の姿を隠すこの闇が晴れるまで、私は見張りを続けるつもりだった。明日も朝から仕事だけど、まあ頑張るしかない。

今夜は徹夜覚悟だ、という私の気持ちを悟って、ミカは何やら考
えるような仕草をした。そして、ぱつと手のひらを上に向けて、
次の瞬間には、そこに白い陶器で出来た小さな入れ物が乗っていた。
私もよく知っているその容器には、顔や体に塗るクリームが入っ
ているはず。普段、就寝前の私にそのクリームを塗るのが、ミカの
仕事だった。

誓って言うが、別に私が「塗ってくれ」と頼んでいる訳ではない。
むしろちよつと嫌がっているのに、ミカが勝手に塗りたくってくる
のだ。

彼は何故か美容に厳しく、ずぼらな性格の私が肌や髪の手入れを
怠っていると本気で怒ってくる。静かにキレられるのだ。

しかし、いくら注意しても私の態度が改善しないので、今ではミ
カが勝手に全部やってしまう。私の体なのに……

「ちよつと、やめ」

正面を向いていた私の顔を、ミカがぐいつと自分の方へ向けた。
そうして手に取った乳白色のクリームを、私の顔面に塗りたくって
きたのだ。

寮を出る前にお風呂には入ってきたけれど……今日はもう、クリ
ームいいじゃない。私まだ10代だし、1日欠かしたくらいでは劣
化しないよ。

そんな事を思いながら、傍若無人なミカに訴える。

「今日は、んぐつ……もういい……んむ」

が、クリームを塗ってくるミカの手に邪魔されて上手く喋れず。

このクリームは塗った後もべたべたせず、ほんのり花のいい香り
もするから私も気に入っているのだけど、こんな乱暴に塗られるの
は嫌だ。

しかしミカを止めるもの難しい。彼は自分の望みのままに生きて
いるから、私が「嫌だ」と言っても聞かないだろうし。第一に、私
の意見なんて取り入れる気がないのだ。

「もっ……」

私は早々に諦めて、ミカの好きにさせる事にした。どこかで黒魔
術師の気配がしないか、襲われた人間の悲鳴が聞こえないかと警戒
しながら。

(あれ？ 私あれからどうしたんだっけ？)

夢と現実のまどろみの中で、ぼんやりとそんなことを考える。
意識はだんだんと覚醒していき、まぶたに映る朝日を感じて飛び
起きた。

「……朝っ!？」

見慣れた部屋。寮の自室だ。そして私が乗っているのは、使い慣
れた古いベッド。

部屋の中にはミカもいて、宙に浮かんで優雅に足を組み、グラス
片手に血のように赤い液体 トリム酒を飲んでいた。

「あれ？ 私……」

頭を抱えて記憶を掘り起こす。昨夜、木の上でミカがクリームを塗り出した事は覚えている。確かその後、三つ編みにしていた髪も解かれて整えられたはずだが、その辺りから記憶がない。

髪をすくミカの手つきが優しくて、すごく気持ちよかったような

……。

「まさか私、髪とかれてる途中で寝ちゃった？」

ミカを見上げ、確信を持って聞いた。黒魔術師を倒すぞと意気込んでいたのに、張り込みの途中で寝てしまっなんて。くそう、不覚。ミカはグラスの中のトリム酒を飲み干し、にやりと笑って言った。

「眠ったお前を私が運んであげたんだよ。対価を貰いたいところだが、今回は大目にみてあげる。魔力は使っていないから」

彼の言い草に、私はムツと眉根を寄せる。

「対価をもらいたいのは、こっちだよ！勝手に人の顔にクリーム塗りたくってきたり、頼んでもないのに髪梳かしてきたりして！」
「その頼んでもない行為で、気持ちよくなって眠ってしまったのは誰だった？」

そう言われて、私はぐぬぬと黙り込んだ。

ミカは私を言い負かしたことに満足したような笑みを浮かべると、グラスとトリム酒の入った瓶を持ったまま消えてしまった。おそろく、”本来彼がいるべき世界”に一時的に帰ったのだろう。

ミカは朝の真っ白な日差しが苦手らしく、通常この時間帯はほとんど引きこもっているから。

しばらく彼が消えた辺りを見つめていた私だが、ハッと我に返る

と、急いで身支度を整えた。

昨晚、私が眠ってしまった後で黒魔術師が来ていたらどうしよう、
と思いつながら。

しかし心配は杞憂だったらしい。

魔術師団の研究棟へ向かう道すがら警備の騎士に聞いてみたが、
何も異常はなかったとの事だった。

ホッと息をつくと同時に、これは長期戦になるかもしれないと思
った。エリク王子の殺害を諦めていないなら犯人はまたやって来る
はずだが、それが1週間後か1ヶ月後かは分からないのだ。

で、何事もなく2週間が過ぎた。予想通りの長期戦に突入。

私は相変わらず、隊長の判断によって、1度も夜の警備には加わ
らせてもらえなかった。なので初日と同じく、一人で密かに張り込
みを続けていた。

しかし日中仕事 内容は掃除と雑用だが を抱えている中で、
夜も徹夜で張り込みをするのは体力的にキツイ。睡眠不足でへろへ
ろになっているところへ黒魔術師が現れたら、きつとまともに戦え
ないし。

そこで私は、途中から夜の張り込みをミカに頼むことにした。も
ちろんその日ごとに、対価のトリム酒を渡して。

トリム酒は高く、毎日渡すたびに私のお給料が確実に飛んでいく
のだが、他に手段が無いから仕方がない。

(だいたい、実際にミカが張り込みによく訳じゃないのに)

私の代わりに城の警備に行ってくれているのは、蛇だ。いつもはミカの腕に巻きついていている黄金でできた蛇が、ミカの意志によってまるで生きているかのように動き出すのだ。

そしてミカは、その蛇に張り込みに行かせているというわけ。自分では動かす。

もちろん、蛇はミカの魔力で動いているという事は分かっているけれど、私の寮の部屋の中で悠々としている彼に対価を払うのは何だか釈然としない。

「クロエ」

その日の夕方、仕事を終えて研究室を出ようとした時だった。隊長に突然、声をかけられた。

「お前も今日の警備に加われ。外回りだ」

隊長が私に掃除と雑用以外の仕事を回すなんて、珍しいこともあるものだ。私は軽く目を見開いた。

「いいんですか？ 私も加わって」

「人が足りないから、お前のような役立たずでも使わなければ仕方がない。周りの足を引っ張るなよ」

突き放すように隊長が言う。どうやら、長期戦の影響が出始めているらしい。厳戒態勢が続く中で犯人がなかなか現れず、みんな疲れってきているのだ。

特に魔術師は、騎士の10分の1ほどしか人数がいない。その少ない人数で毎夜の警備を回しているから、へばる人だって出てくる

だろう。最近は日中に居眠りしている隊員も出てきたし、隊長の目の下にも青いクマができています。

で、その疲れきった隊員に休息を与えるために、私が引つ張り出されたのだろう。

でも理由は何でもいい。この魔術師団に入ってから、まともな仕事を与えてもらえたのは初めてだから、ちょっと嬉しかったりする。

日が暮れ、城の警備についた。私に割り当てられたのは外の見回りだったので、裏庭にあるただっ広い植物園を、見学がてらウロウロと歩き回った。今日は私がこうして起きている訳だから、ミカ（の蛇）には城の監視を頼んでいない。

しかし広い植物園だ。王族の人たちが楽しむため、庭園のように整えられているところもあれば、端の方では何の華やかさも無い薬草が大量に栽培されている。

ヤケドによく効くものに、切り傷に効果があるもの、解熱の作用があるもの。栽培されている葉っぱの働きを、頭の中で順番に言い当てていく。

魔術師団に入る前には、山でとった薬草を売って生計を立てていたから、結構詳しくかったりするのだ。

園をぐるりと回って異常がないことを確認した後、他のところを警備しようと、木でできた柵を開けた時だった。

「魔術師のクロエだな？」

暗闇の中で背後から突然声をかけられて、私は「ひい」と情けない声を上げてしまった。バクバクと脈打つ心臓を押さえて後ろを振り向くと、腰に剣をたずさえた騎士が一人、手に持ったランプを高くかかげて、こちらを照らしていた。

「は、はい……。私はクロエですが」

「エリック様がお呼びだ。警備はいいから、ついて来い」

それだけ言ってさっさと歩いていってしまった背の高い騎士のあとを、私は慌てて追いかけた。エリック王子が私に一体何の用だろうか、首をひねりながら。

恋の病 05

「おお、来たな」

初めて入った王族の部屋。

きらきら輝くシャンデリアに、繊細な調度品の数々、床には植物の文様が描かれたじゅうたんが敷かれてあり、寮の私の部屋とは比べものにならないくらい豪華だ。ほんと……悲しくなるくらい。

東の壁には寝室へ続いているらしい扉があり、南側一面には分厚いカーテンが引かれていたが、その先にはきつとバルコニーがあるのだろうと思われた。

王子は中央に置かれたソファアに座り、私に向かって軽く手を挙げている。

「あ、どうも」

足を踏み入れるのにも勇気がいるような、庶民な自分には場違いな部屋を目の当たりにし、私は完全に萎縮していた。汚れたブーツでこのじゅうたん踏んだら、怒られるだろうか？

「何してるんだ。早く入って来い。聞きたいことがあるから、ちょっと座ってくれ」

「あ、はい」

恐る恐る足を踏み出す。じゅうたんを踏んでも怒られなかった。ふうと息をついて王子の元へ向かう。王子というより、その周りの人たちが怖いんだよな。

眼光鋭い護衛の騎士たちに、私の事を品定めするような目で見てくる侍女たち。みんなエリク王子を守ろうとしてるんだろうけど、

私そんなに怪しい者じゃないんです。一応この国の魔術師なんです。

「失礼します」

低いテーブルを挟んで王子の向かいに座ると、王子は「大事な話だから」と人払いをした。侍女たちはお茶を出してくれた後に退室したが、騎士たちは反対する。

「王子、いつまた犯人がやってくるとも分からないのですよ」

「大丈夫だ。クロエが魔術を使って撃退してくれる」

「その者はまだ新人のようですが……」

幼さの残る私の顔を見て、銀色の髪をした騎士が不安そうに言う。こんな近くで王子の警護をしているということはエリートなのだろう。きっと剣の腕も立つはずだ。

私は王子に聞いた。

「人払いが必要な話なのですか？」

「お前の故郷の話だ」

エリク王子の表情が真剣になる。

「……だったら、人払いは必要ないですよ。別に聞かれても困りませんから」

聞かれても困らないけれど、あまり喋りたくない話題ではある。しかし王子の前で口をつぐむ訳にもいかないから、私はしょうがなくそう言った。

2人の騎士を部屋に残し、その他の護衛を外に出した後で、王子は静かに話し出した。

「この前、お前言ってただろ？ 両親が黒魔術師に殺されたって」
「はい」

「それがちょっと気になってな。調べさせてもらった」

ため息をつきたくなった。やっぱり『両親が殺された』だなんて、王子に言わなければよかったかも。エリク王子は今大変な時なのに、私の事で時間を取らせてしまったようだ。

「わざわざ調べにならなくても、聞いて頂ければ答えましたよ」
「まあ、暇だったんだ。最近は城に籠りっぱなしで」

王子はゆるいほほ笑みを浮かべて、肩をすくめる。そしてテープルの上に置かれた資料を見ながら、話を続けた。

「これは12年前にサハスという村で起きた虐殺事件の報告書だ。事件が発覚したきっかけは一人の少女だった。12年前の10月。トトポリという田舎町の私警団の詰め所に、幼い少女が助けを求めてやってきた。数人の団員が少女に訴えられるがまま、彼女の家があるという隣村……サハスへ向かうと」

王子が、私の反応を伺うようにこちらを見た。

「村の住人全員、飼われていた家畜までもが一匹残らず殺され、その死体があちこちに転がっていた。ある者は腕が飛び、ある者は首が取れ、土には血がしみ込んで赤黒くなっていた。この世の地獄のようだった、と、この報告書には書かれている」

ひらひらと、王子が紙の束をふる。私は目を伏せて、ただ話を聞いていた。やだなあ……

王子はまた、資料に視線を戻す。

「村人たちを殺したのは見知らぬ黒魔術師だ、と、少女は説明した。幼い彼女もその時この場にいたのだが、隠れていたから殺されなかつたらしい。その後サハス村には他の私警団員や騎士たちが派遣され、周辺を探しまわったが、村民を虐殺した黒魔術師はとつくに逃走しており、捕まえることはできなかった。そして唯一の生き残りである少女も、村人たちの埋葬が終わった後に、こつ然と姿を消してしまった」

王子の空色の瞳が、じつと私を見据えてくる。

「少女の髪と瞳は黒く、年齢は5、6歳。……これはお前だな？」

「……はい」

素直にうなづく。私には他人に教えられない秘密が1つあるけれど、これはその秘密とは違う。教えたって、別に問題はない。

私の答えを聞いて、王子も静かにうなづいた。扉の近くに立っている護衛の騎士の表情に、私に対する同情の色が浮かぶ。

「どうして事件の後、姿を消したんだ？」

王子の声音は、私を責めるようなものではなかった。

「もう、そこに留まる理由がなくなったからです。事件のことや犯人のこと、私が目撃した全ては騎士の方たちにお話ししましたからそれに事件のことを思い出してしまうので、村の近くにいるのは辛くて……」

「……そうか。では、その後、お前は一人でどうやって生きてきたんだ？」

「町の食堂なんかで配膳の手伝いをさせてもらったり、山で採った薬草を売ったりしながら、いろんな町を転々としていました」

私の説明に、王子は目を丸くした。

「まだ子供だったお前が、よく無事に生きてこれたな」

「はい。危ない目にも合いましたけど……まあ、なんとか」

そう言っただけ苦笑する。実のところ、サハス村を離れた時点で私はミカがいたから、今日まで無事に生きてこれたのだ。そうでなければ、とてもじゃないけど一人では生活できなかった。さらわれて他国にでも売られてたんじゃないだろうか。

王子は私の過酷な半生に呆れたような、それでいて感心したような顔を見ると、気を取り直して喋り出した。

「だが、12年前の虐殺事件の生き残りが、今も無事でいてくれてよかった。かなり大きな、そして衝撃的な事件だったが、未だに犯人を捕まえられていないからな」

ぺらぺらと資料をめくりながら、王子は続ける。

「お前は唯一の目撃者だ。犯人のことで覚えていることはないか？

例えばこの報告書によると、犯人の男は

エリク王子の言葉をさえぎり、私が引き継いだ。

「犯人の男は40代くらいで細身。茶色い髪をしていました。目立った外見的特徴は無く、どこにでもいそうな男です。服装はしっかりしていて、清潔感がありました。もしかしたら貴族かもしれませんが。犯人が私の住むサハス村を訪れたとき、彼はまだ黒魔術師で

はありませんでした」

ほとんど息継ぎをしないで、流れるように喋り続ける。

「犯人の男はまず最初に私の家を訪れ、抵抗する間を与えずに両親を殺しました。父と母は悪魔や黒魔術師のことを専門に研究していたのですが、男は両親が集めていた資料をあさり、悪魔を召還する魔法陣を見つけ、その場で悪魔を呼び出したんです」

忌まわしい過去を語っているというのに、私の声は自分でも驚くほど落ち着いていた。

「悪魔と契約を結び黒魔術師となった男は、その力を試すために村人を殺し始めました。私は家の中に隠れていましたが、村人の悲鳴と男の笑い声はずっと聞こえていました。そして辺りが静かになった頃、私は家から這い出し、この村で起きた惨劇を目の当たりにしました。犯人はすでにおらず、私は助けを求めため、急いで隣町に向かいました」

絶対に言う事のできない一部分を除いて、真実を話した。

「でもこれらの情報はすでに、12年前に私警団の方や騎士団の方にお話ししてあります。犯人に繋がりそうなことは全て。ですから今、私が新たに提供できる情報は無いんです」

「何でもいいんだ。サハス村の虐殺は、国内でも有名な事件になっている。国の安定のためにも、凶悪な黒魔術師の情報が欲しい。今、捜査は手詰まり状態だから」

王都から遠く離れた小さな村で起きたことを、エリク王子がこんなに気にかけてくれるのが嬉しかった。他に犠牲者を出したくない

という思いからだろうが、それは私も同じ。しかし

「エリク王子……私も犯人には早く捕まっしてほしいですから、できる事なら何でもします。でも、時が経つにつれて記憶は薄れていく一方で、新たに思い出すこともありません」

そこで私は1度目をつぶった後、顔を上げて正面に座っている王子を見つめた。

「犯人のことで何か気づいたことがあれば、またお話ししますから、今日はもうこの話はやめて頂けないでしょうか。私まだ……整理がついていないんです。優しかった両親や……村の人たちが殺されたこと……」

自分の手のひらをぎゅっと握る。蘇ってくる凄惨な記憶を、私は頭の中で1つずつ打ち消していった。こんなところで取り乱す訳にはいかないから。

エリク王子はゆっくりうなづいた後、優しい声で言った。

「わかった。嫌なこと聞いて悪かったな」

「いいえ」

私は気持ちを切り替えて、にこりと笑った。

「でも、まずはエリク王子を襲った犯人を捕まえなくちゃですね。黒魔術師の数はそう多くないですから、一人一人倒していけば、いつか私の両親を殺した犯人に当たるかもしれません」

「ああ、そうだな」

そう言って、エリク王子もそつとほほ笑む。彼には、ミカとはま

た違った魅力がある。ミカが陰なら王子は陽。王族なのに傲慢なところがなく、思いやりがあって、明るく爽やかで優しい。

だけど彼を見てると、私は時々辛くなる。自分がものすごく汚れた人間に思えるから。

エリク王子に挨拶をして、私は足早に部屋を出た。王子はこれから少し仕事をした後で眠るらしい。

ついさっきまで王子としていた話題を引きずりながら、暗い顔をして黙々と廊下を歩いていけると、進行方向によく目立つ”孔雀”が立っていることに気づいた。

ミカだ。

彼は片方の口角を上げて笑いながら、じつとこつちを見つめてきた。私は何も言わずに、視線も合わさずに彼の横を通り過ぎる。すぐ後ろにミカがついてくるのが分かった。

階段を降りていく時に侍女らしき女性とすれ違ったけど、彼女にはミカの姿が見えていないらしい。何の反応もしなかったから。

「何なの？」

苛々しながら聞いた。振り向いて確認はしないけど、ミカはさっきからずっと笑っているような気がした。ただでさえ、私は今、気分がよくないのに。

「お前があの人間としていた話」

闇に溶けるような声で、ミカが話し出す。

姿は見えなかったけど、近くで聞いていたらしい。『あの人間』とは、エリク王子のことだ。

私はぐつと眉に力を入れると、後ろを振り返ってミカを睨みつけた。そうするとミカは、さらに楽しそうに笑って言う。

「『時が経つにつれて記憶は薄れていく一方で』……？」

それはさつき、私が王子に言った言葉だ。故郷の村で起きた事件について、私の記憶はだんだんとあいまいになっていく、と。

「それは嘘だろう」

疑問系ではない。ミカは確信しているのだ。

「あの時の光景は、お前の脳裏に強く焼き付いているはずだ。今でも、夢にみるくらい」

意地悪な表情をして言う。

確かに悪夢をみることはある。そうしてハッと目を覚ますと、たいていミカはベッドの側で愉快そうにほほ笑んでいるのだ。

ミカは私を守ってくれるし、力を貸してくれる。しかし、完全に私の味方というわけではない。私が精神的に苦しんでいると、ミカはいつも優しく頭を撫でてくれるが、同時に、最高に楽しそうな顔をしているのだ。

”彼ら”はそういう生き物なのだ、今では諦めているけれど。

「うるさい」

私は背の高いミカを睨み上げると、それだけ言ってプイと顔を背けた。唇を噛みながらきびすを返し、また前に向かって歩き出す。

こつこつという時はさつきと切り上げてしまったほうがいい。彼との口論で勝つたためしは無かったから。

負け犬のごとく逃げ出した私の後ろを、ミカは再びゆっくりと歩いてきた。たぶんまだ笑ってる。

王族の居住区を抜け、城を出る。これからまた、警備の仕事に戻らなくてはならない。しかし、私は隊長から具体的に警備の場所を指示されたわけではなかった。ただ、「お前は外だ」と言われただけなのだ。

さてどこへ行こうかと思案していると、ふいに視線を感じた。殺気を感じてぞわりと背筋が粟立つほどの、強い眼差し。

ミカが後ろで、フフと声を出して笑う。

パツと左へ顔を向けると、庭の手前を横切る外回廊の柱の影にまぎれて、白い人影が浮かび上がった。

一瞬、城に出ると噂されている、昔殺された侍女の幽霊かと思っ
て悲鳴を上げそうになる。黒魔術師や悪魔は全然怖くないけれど、
幽霊はちよつと怖い。

しかしその正体はもちろん、幽霊などではない。

私を射殺さんばかりの勢いで睨みつけながら、スザンナが大きな
足音を立ててこちらに近づいてきた。

「スザンナ？」

近づいてくる人物を半ば呆然と見つめながら、ぽつりと言った。彼女は今日、夜の警備の担当ではないはず。普通なら家に帰っている時間だが……

「どうしたんです？」

質問してみたが、スザンナはそれに答えなかった。私の目の前までやってくると、こちらを激しく睨みながら言う。

「どこへ行っていたのよ」

その問いの意味がいまいち理解できず、私はただ黙ってスザンナを見つめた。眉間にしわを寄せ目をつり上げている彼女の顔は、闇闇の中で見ると怖さ倍増だ。歯を剥き出して、今にも噛みついてきそう。

「どこへ行っていたのかと聞いているの！ 今、城の中から出てきたでしょ！？ それもエリク様のお部屋がある方から！」

何も言わない私にしびれを切らしたのか、スザンナはいきなり大きな声で怒鳴り始めた。私のすぐ後ろにはミカがいるのだけど、やはり他の人には見えていないらしい。

「この女、お前に嫉妬しているね」

私の耳元に顔を寄せ、愉快そうにミカが言う。しかしそんな事、私だって分かっている。素直に「エリク王子とお話してきました」なんて言ったら、本当に殺されかねない。スザンナの形相はそれくらい凄まじかった。恋する乙女の顔ではないよ、これ。

「えっと……ちょっと用事があつて……確かにエリク王子のお部屋の近くには行きましたけど、会ってませんよ」
「本当でしょうね！」

スザンナはこちらにずいっと顔を近づけ、続ける。

「あんたみたいな庶民はエリク様と話す権利もないんだってこと、よく覚えておきなさいよ！」

人差し指を突き立て、怒りで血走った目を剥きながら、吐き捨てるように言われた。私が言い返さないのを確認すると、高飛車に鼻を鳴らして西門の方へ去っていく。

その後ろ姿を見送りながら、そういえばスザンナは西門を利用してるんだな、と漠然と思った。家があつちの方にあるんだろう。

エリク王子を襲った黒魔術師が通ったのも西門。警備の騎士が2人殺された場所。

彼女はエリク王子にのめり込んでいる。ほとんど話したこともない相手を、どうしてそれほど好きになれるんだろう。

今のスザンナは危険だ。何をしでかすかわからない。

……いや。もう、しでかしているのかも。

「ミカ……もし彼女に悪魔が憑いていたら、ミカには分かる？」

後ろにいるミカに問いかける。

「ああ、分かるよ。だが教えてやらない。それじゃ面白くないから」
私が仏頂面で振り返ると、ミカは真紅の瞳を三日月のように細めて笑った。このやろうめ。

スザンナがエリク王子を襲った黒魔術師だと考えるのは短慮すぎるだろうか。自分に振り向いてくれないエリク王子、他の女のものになるならいつそ……なんて考えるのは。

うーん……。今のスザンナならやりかねないけど　なんせ、この間は、同僚（私）に攻撃魔術を喰らわせようとしたのだ。普通なら懲罰もの。

しかし一方で、彼女に悪魔を召還する度胸が、王子を殺す度胸があるだろうかとも思う。でも、カツとなったら勢いでやつちやいそいだしなあ。

私がうんうんと唸っていると、

「なんだ、きみか」

後ろから強い光を当てられた。

杖の先に光を灯したダンだ。

彼はスザンナと違って、私と同じく今日の夜の警備当番だ。今も外を見回っていて、暗闇で唸っている不審者を警戒したらしい。

「今、スザンナと会ったよ。こんな時間まで何してたんだらう」

不審者が私だと気づいた途端、興味を無くしたようにきびすを返すダンに、その声をかけた。彼はスザンナの幼なじみだ。彼女について詳しいはず。

「ああ、さつきまで僕と話してたんだ。彼女最近恋に悩んでるから、相談に乗ってたんだよ」

淡々とダンが話す。彼は基本的に無表情だし、あまり感情を表に出さない。ダンとスザンナを足して割れば、ちょうどいい感じの間が生まれそうなのにな。

「恋の相談……エリク王子のことだね」

私は納得してうなづいた。その相談が終わりダンと別れ、ちょうど帰ろうとした時、スザンナは私が城から出てくるのを目撃したに違いない。城の出入り口はたくさんあるが、私が出てきたところは王族の居住区に近いところだったし。

ダンはちらりとこっちを見て、肩をすくめた。

「そっだよ。ついこの間、スーは王子に振られたんだ。それで落ち込んでる」

「振られた？ ってことは告白したってこと!？」

思わず叫んだ。スザンナっては何を考えているんだ。

好きな人に告白すると言っても、相手が王族では簡単にいかない。告白するチャンスがあったとしても、普通は相手の立場をおもんばかって遠慮するはずだが。

「スーは普段から、むりやり用事をみつければ城に入ってたんだ。エリク王子に会うために。それで、ちょうど1ヶ月くらい前かな。スーが泣いて僕のところに来て……。城の廊下でエリク王子とすれ違ったらしいんだけど、勢いで想いを伝えてしまったって……。それで振られたって号泣してた」

ダンには警備を続けるため、辺りを歩き回りながら静かに説明した。私はその一本調子な声を聞きながら、彼の後について回る。ミカはさらに遅れて、後ろからついてきた。

しかしスザンナは突拍子もないことをする。きっと王子の周りには護衛の人たちがたくさんいただろうに。よく「無礼者」と放り出されなかったな。

まあ、エリク王子がそんなことはさせないか。

でもスザンナは貴族と言えども下級貴族で、王族よりも庶民の方に近い立場だ。

「こつちを見てほほ笑んでくれた王子を見て、『好きだ』っていう気持ちを抑えられなくなっただんだった。昔からスーは素直な子なんだ」

眠そうな目で辺りを探りながら、ダンが言う。

スザンナが素直……。自分の気持ちに正直だという点では、確かに素直だけど。でも、どちらかと言えば自己中心の方がしっくりくるなと思った。心の中だけで。

そしてエリク王子にも文句を言ってやりたくなった。だれかれ構わずほほ笑みかけるなんて、あんた自分の顔のよさを分かっているのか、と。

「ダンにはスザンナと幼なじみだよ。スザンナはいつからエリク王子のことが好きだったの？」

「昔からだよ。スーの父親も魔術師だったから、城で開かれる建国祭の舞踏会に呼ばれてただんだけ……8つの時かな、それに初めてスーもついていったんだ」

杖先の光がダンの顔を明るく照らし、頬のそばかすを浮かび上が

らせた。私が言うのもなんだけど、ダンって顔立ちが地味だよなあ。私が言うのもなんだけど。

「そこでエリク王子と少し会話を交して、恋に落ちたらしい。帰ってきてから大変だったよ。『あの人が私の王子さまよ!』って興奮しちゃって」

普段はあまり喋らないダンだけど、幼なじみのことになるのと饒舌になるようだ。もう少し突っ込んで聞いてみた。

「最近、スザンナちょっとおかしいと思わない？　ダンから見て、どう？」

「確かに少し、情緒不安定だね。王子への想いが届かずに落ち込んでるんだよ、かわいそうに。スーは10年以上も、一途にエリク王子のこと想ってきたんだ」

スザンナのことを話すダンの声音には愛情がにじんでいた。私の目にはわがままに見えるスザンナの性格も、ダンの目には素直で天真爛漫に映っているんだろうか。

話が終わると、私はダンと別れて警備を続けた。

今の私の考えとしては、スザンナがエリク王子を襲った黒魔術師だという可能性が1割。他に犯人がいる可能性が9割ってところだろうか。

だってもしスザンナが犯人だったとしたら、その動機は『失恋』だということになる。振られた腹いせに殺そうと思ったのか……。

だけど恋をしたことのない私には、失恋しただけで相手を殺そうと思う心理が分からない。家族でもなく、血のつながりもない相手をそこまで想うなんて……私にはきつと一生、理解できないんじゃないだろうか。

それはそれで、寂しいけれど。

夜通しの警備のかい無く、その日も犯人は現れなかった。東の空に太陽が昇りはじめてから、私は警備を交代してもらって寮に帰り、そして午後には研究室へ仕事に向かった。午前中は休めたけれど、まだちょっと眠い。

お金の問題でそろそろミカにトリム酒を献上するのもキツくなってきたので、今夜は自分で見張りに行こうと思っていたのだが、この状態だと途中で寝てしまいそう。

しばらく睡眠を取らなくても大丈夫！　っていう魔術があればいいのに。

仕事を終えて寮に帰る。部屋に入ると同時にミカを呼び出した。

「ミカ」

一言声をかけるだけで、彼は何も無い空間からゆっくりと姿を現した。切羽詰まった私とは反対に、余裕のある表情。

私が何も言わないうちから、ミカが口を開く。

「金がないんだね？」

すべて見透かされていた。

下手にとり繕ってもミカには効かない。私はいさぎよく認め、うなづいた。

「もう今月のお給料すっ飛んじゃったよ。今日もミカに城の見張りを頼みたいんだけど、対価はトリム酒以外のものにしてほしくて…」

…。できればそんなに高くないやつ」

トリム酒は貴族の間ではよく飲まれているお酒だけど、それほどいいお給料をもらっていない私が10本も20本も買うとなると、かなり厳しい。

貯金はまだいくら残っているけど、もしもの時のため、これ以上は使いたくない。

「かぼちゃパイとかじゃダメかな？ 甘くておいしいよ」

「ご機嫌を伺うように言ってみただけど、ミカは薄く笑っただけだった。つまり、「話にならない」ってこと。

「じゃあ、ミカは何が欲しいのか言ってみてよ」

私が開き直ると、ミカはこういう展開になると分かっていたような、悠々とした口調でこうのたまった。

「私が今欲しいものに金はかからない。こちらへおいで、クロエ」

何となく嫌な予感がして、二人掛けの小さなソファアに腰をおろしたミカの後を、私は追わなかった。黙ってつつ立っている私に、ミカがすつと指先を向けてくる。

と同時に体がふわりと宙に浮いた。「わわっ」と慌ててみても、空中ではどうにもならない。ゆっくりと私の体は移動していき、気づくとミカの膝の上に座っていた。ほんと、ミカの力って反則だ。

「なにするつもり？」

獲物を前に舌なめずりでもしそうなミカを見て、私は小さく震え

た。

ミカの紅い瞳は興奮を押し殺したように妖しく輝いていて、薄い唇は大きく弧を描いている。目を奪われるほど美しく、凶悪で、そして最高に楽しそうな顔。

「なにするつもりなのか言ってよ」

戦々恐々として言う。

ミカが私を殺すことはない。絶対に。それが分かっているても恐ろしい。

なぜなら今の彼の表情には、嗜虐心がありありと浮かび上がっているからだ。思わず泣きそうになる。

「何なの？ 腕を引き千切ったりしないよね？」

自分の体をきつく抱いた。

「そんなくだらない事はしないよ。いいかいクロエ、今からする事に耐え、私を楽しませてくれるのならば、私もお前のために働こう。この国の王子を襲ったという黒魔術師を倒すまで、無償でお前に協力するよ」

恐怖に震える私の反応さえ、ミカは楽しんでいるようだった。彼の甘ったるい声は脳を溶かし、私の思考能力を奪っていく。

「痛いのはいや」

小さくかすれた声で懇願した。怖いけれど、黒魔術師を倒すのにミカの協力は絶対に必要なのだ。

「痛くはないよ。肉体的にはね」

ミカは猫なで声でそう言うと、うつむく私の頭を両手で覆った。ぐらり、脳が揺れるような感覚。私はぎゅっと目をつぶる。

途端に真っ暗だった頭の中で、あざやかな映像が再生され始めた。

これは記憶だ。

忌まわしい、私の過去の記憶。

必死で頭の底に押し込めてきた記憶が、勝手に掘り起こされていく。

私はミカの意図を察し、抵抗しようとした。

「やめて、いや……」

暴れたくても体に力は入らず、まぶたも開かない。弱々しく抵抗の言葉を吐きながらも、脱力してミカに体を預けることしかできなかった。

「封じた記憶を解いてごらん。お前はあの日のことを忘れてはいないし、記憶は薄れていないだろう?」

私に残酷なことをしようとしているミカの声は、ひたすら甘く優しくかった。

彼は私にあの日のこと　あの虐殺事件のあった日のことを、詳しく思い出させようとしている。きつと、私が王子に『時が経つにつれて記憶は薄れていく一方で……』なんて話した事への当てつけだ。それが嘘だと知っていて。

ろくな抵抗もできずに、私の意識は過去の記憶と混同していった。

懐かしい風景が見える。私はひとり、実家の裏庭に立っていた。いや、ひとりではない。庭には、幼い頃の私もいた。短い手足を一生懸命に動かして、井戸の水をくみ上げている。

山の中腹にあった私の村は、周りを広大な自然に囲まれていた。しかし高い木は生えておらず、あるのは豊かな草原ばかり。景色が

よく、遠くには雄大な山々が見える。

私の実家も含め、ぽつぽつと見える家々はほとんど木とレンガで出来ていて、温かくも、質素でこじんまりとした造りだ。

100人にも満たない人口より、飼われているヤギの数の方が多いような田舎村だった。

まるで夢の中にいるみたい。12年前に離れたつきり村には戻っていないのに、目に映る景色は妙にあざやかでリアルだ。芝生の緑は、より濃くはつきりとした緑で、太陽の光はより明るい黄色。

そつと足を踏み出して、両親がいるであろう家へと近づく。キッチンの窓から中を覗くと、狭いリビングに母の姿が見えた。濃い茶色の豊かな巻き毛、優しい顔立ち。お気に入りだった白いエプロンをつけて椅子に座り、やぶれた服を繕つくろっている。

(お母さん……)

こみ上げてくる涙をぐつと堪えた。彼女は今、生きている。

だけでもうすぐ死ぬ。これはあの日の記憶だから、その結末は変えられない。変えられないのに、それをまた見なければならぬなんて……

現実の私が苦しげにうなり、ミカの服をきつく握りしめた。

見たくない。しかしミカの術のせいだ、どうしてもまぶたを開ける事ができないのだ。

母を見ているのが辛くなり、私はもう1度、過去の私がいる方へ視線を向けた。

すると小さな私は、水の入った桶を持ちながら、じつと山裾の方を見つめていた。

”やつ”が来たのだ。

私もくるりと振り向いた。ふもとの方から、一人の男が山を登ってくる。身なりはきちんとしているが、眼鏡をかけていて顔立ちは平凡。どこかの貴族のおじさん、というのが、やつを見た第一印象だった。

貴族がこんな田舎へやってくることは珍しいが、当時の私にはそれほど驚くこともなかった。

父、母ともに黒魔術師や悪魔の研究をしていて、若いながらもその分野では名の知れた人たちだったから、王都から偉い人がやって来ることも何度かあったのだ。

この村に住み始めたのは私が生まれてからだったらしく、それまでは王のもとで研究にいそしんでいたのだとか。

父はただの研究員で、魔力はなかった。しかし母は落ちぶれた貴族の末裔で、魔術師になれるほどではないが、多少の魔力は持っていたらしい。暖炉の火をともし程度の簡単な術なら、母はよく使っていたから。

私の魔力は母譲りなのだ。

”やつ”はどんどん近づいてくる。

幼い私は水桶を置くと、そっと家の影に隠れた。方向的にうちへ来るのは分かったが、見知らぬ人に話しかけ、案内をかってでるほど気さくな子供ではなかったから。どちらかという人見知りで、引っ込み思案だったのだ。

男が一人でいることに、この時の私は小さな違和感を覚えていた。今まで都からやってきた人たちは、みんな従者だったり荷物を乗せた馬だったりをつれていたのに、それがないから。

男は従者どころか、何も荷物を持っていなかった。片手に持った地図と、腰にたずさえた杖以外は。

幼い私は、男の持っている杖に気づいて目を輝かせた。このころの私は白魔術師になるのが夢だったから　しかし生まれ持った私の魔力では、魔術師にまでのぼりつめるのは難しいことも分かっていたけど　男が魔術師だった場合、なにか術を教えてもらえないだろうかと期待したのだ。

もちろん、杖を持っているからといって魔術師であるとは限らない。私の母だってそうだ。

だが私は母以外に魔術を使える人を知らなかったので、何だか妙に嬉しくなつて、らしくもなく、自分から男に声をかけてみようかと思ったりした。

しかし家の前までやってきた男の表情を見て、急に不安を覚える。

わき上がる期待と興奮を、無理矢理に抑えつけているような男の顔。自然と漏れる笑みを隠そうとして唇は変な具合に歪み、たれ気味の目はらんらんと光っている。

山を登ってきたせい、それとも興奮のせい、男は肩を上下させて荒い息をついていた。だが、うちの玄関扉の前までやってくると呼吸を整え、仮面をかぶるようにして穏やかな表情をつくりあげた。柔和な紳士の表情を。

男が扉をノックする。今の私は思わず、やつに飛び掛かりそうになったが、そんな事をして両親を助けられるわけではないと思いつまんだ。ここは私の記憶の中。未来は変えられない。

玄関に近いリビングにいた母は、すぐに扉を開けた。見知らぬ男を見て、やわらかな声で「どちら様？」と訪ねる。

男がそれになんて答えたのかは、幼い私には聞き取れなかった。

ただ、にこにここと笑う男の姿を不気味に思った事は覚えている。

男が母と話しているうちに、小さな私は裏口から家の中へ入って

いった。裏口はキッチンに続いていたので、そこからそつとリビングの方を覗く。

今の私も、過去の私の後を追って室内に入った。

“その時”が近づいている。

しばらく玄関で立ち話をした後、母は父を呼びに奥の書斎へと向かった。おそらく男が、父を呼んでほしいと頼んだのだろう。

母がいなくなった途端、男の顔に勝利を確信したような笑みが浮かんだ。手に持っていた地図を捨て、腰にたずさえた杖を取り、背中の方に隠した。

魔術を使う者がその手に杖を取るということは、騎士が剣を抜くと同じこと。今の私なら即座に魔術を使ってその杖を奪おうとするけど、幼い私にそんなことできるはずもない。ただ息を潜めて、奇妙な訪問者が帰ってくれるのを待つだけだった。

家の一番奥は書斎になっており、壁一面に立てられた本棚には、父と母が集めた黒魔術師や悪魔の文献がところ狭しと詰めこまれていた。机の上や床にも資料が散乱していて、いつ行っても足の踏み場がなかったことを覚えている。

母はその書斎から父を連れて戻ってきた。少し長めの黒髪はいつもボサついでいて、かけている丸眼鏡は野暮ったいものだったけれど、私にとってはおかしい父だった。顔のつくりは割と整っていて爽やかだったから、もっとおしゃれすればいいのにと子供心に思ったものだ。

懐かしい父と母。しかし2人はこの後すぐに

「行かないで……行っちゃだめ！」

我慢できずに叫び、玄関に向かおうとする両親の前に立ちはだかっ

が、それには何の意味もなく、2人は私の体をするりと通り抜けていってしまう。

私は顔を歪ませ、ぎりりと歯を噛みしめた。両親を止められないのがもどかしい。憎い男が目の前にいるのに、この手で殺せないことが悔しい。

「なにか？」

玄関にいる男に近づきながら父が聞いた。

(だめ……だめ……)

男は黙って、父が自分の目の前にくるのを待っていた。まるで獲物に飛び掛かるタイミングを計っているよう。

何も言わない男へいぶかしげな視線を送りながら、父が玄関までやってくる。母もそれに続いた。

(だめ)

小麦の入った大きな袋の影に隠れている小さな私。その横で、今の私は震え始めていた。呼吸が乱れて、目尻に涙がたまる。

「やめて、だめ……行っちゃだめ……」

男の眼前に立つと、父はもう1度質問した。

「私になにか」

「だめっ！」

父が言い終わらないうちに、私は叫び出していた。あの男が、隠

していた杖を両親に向けたからだ。

男が短い呪文を唱えると同時に、父と母の体は家の奥へと吹っ飛んだ。

大きな音をたててリビングの壁が破れ、2人は寝室に放り出される。小さな私は絶句して、ただそれを見ていることしかできなかった。突然の展開に思考が追いつかなかったのだ。

「うう……」

体中に傷を作りながらも、両親はまだ生きていた。だが、男の方もそれは承知の上。最初から一撃で相手を殺すつもりはなかったらしい。

今なら分かるが、魔術で人の命を奪う事は、それほど簡単ではない。誰かを殺めることができる術というのは総じて高度な術で、それなりの魔力と難しい呪文が必要だ。

しかし、おそらくこの時の男は、それほど多くの魔力を持ってはいなかった。それに長い詠唱を始めれば、相手にこちらの意図を感じづかれてしまうと思ったのだろう。それなりの攻撃力はあるものの特に高度ではない術。必要な魔力が少なく、唱えなければならぬ呪文も短い術を使用して、男は父と母の虚をついた。

そして歯を見せてにやりと笑うと、倒れている2人のもとへゆっくりと近づいていく。

「やめてよ……っ！」

そう訴えたのは現実の私。目をつぶったまま、ミカの上着をぎゅっと握りしめる。ミカは喉の奥で低く笑いながら、あやすように私の背中を撫でた。しかし脳内に流れる映像は止めてくれない。

男が上着の内側からナイフを取り出し、鞘を抜いた。まず、うっ

ぶせに倒れている父の元に向かうと、一気にその鋭い刃を振り下ろし

「……っっっ」

現実の私が嗚咽を漏らす。もう見ていられない。

両親が死んだあの日から、私はなるべく泣かないようにして過ごしてきた。泣いてる暇があるなら魔術を勉強して、黒魔術師を倒せるようになるのだと。

しかし今は、とてもじゃないけど耐えられない。記憶の中で父が息絶え、男のナイフは母に向けられた。

「嫌、いや……」

心にため込んでいた悲しみや苦しみが、涙となって溢れ出す。ミカが透き通った笑い声を上げながら、そのしずくを舐めとった。どうしてこんなことするの？

父と母は事切れた。男はいったんその場から離れると、奥の書斎へ向かった。真っ青な顔をした小さな私はキッチンで凍りついたまま動かない。ショック状態だったんだろうけど、今思えばそれでよかった。泣いたり悲鳴を上げたりしていれば、男が私の存在に気づき、きつと殺されていただろうから。

「どこだ？ どこにある」

書斎から、男の独り言が聞こえてきた。ばたばたと本が倒れる音、書類をあさっているような音も。

私には1時間にも2時間にも感じられたが、実際はほんの15分ほどだったと思う。何かを探して書斎を荒らしていた男が、目当て

のものを見つけて戻ってきた。手には日焼けした1枚の紙。

男は私のいるキッチンにはちらりとも視線をよこさず、父と母の遺体を引きずって家を出ていった。

幼い私はよろよろと立ち上がり、窓からそつと外を見た。男は書斎から取ってきた紙を見ながら、両親の体から流れ出る血で地面に何かを書いている。魔法陣だ。

今なら分かる。あれは悪魔を呼び出す召喚陣。

悪魔を召喚するためには、人間界と魔界を繋ぐための陣が必要なのだ。ちよつと怪しげな店を探せば、その図式は簡単に手に入る。

が、ほとんどは偽物。

しかし両親の持っていた文献の中には、本物があったようだ。男の狙いもそれだった。

召喚陣の完成とともに、男が呪文を唱える。すると地面の陣が黒い光を放ち、男の顔を不気味に照らした。

「やったぞ……！」

感動したように男が言う。

召喚陣から姿を現したのは、昆虫のイナゴのような顔を持つ悪魔だった。体のほうは人間と変わりなく、上等な背広を着ていて、紳士然とした雰囲気。

悪魔はその複眼の目でさつと辺りを見回した後、目の前の男を見据えて言った。

「契約するか？」

「契約するか？」

「ああ、もちろん」

男は激しくうなづいた。悪魔の声はとても低く、ざらついている。

「悪魔と契約を交わす意味を分かっているか？ 契約を交わすと、お前は俺に魂を差し出さなければならぬ」

「ああ、分かっている。だが、魂を差し出すのは私が寿命を迎えた後だろうか？ 死んだ後で私の魂がお前に喰われ、消えて無くなるのだとしても、どうでもいいさ。生きている今が全てだ。今、幸せならそれでいい」

「そうか」

そうして男と悪魔は契約を交わした。その証として、男の胸に黒い華のような刻印が刻まれる。

「俺の魔力は、その刻印を通じてお前に送られる」

悪魔がそう教えると、男は瞳をギラつかせながら「試してみたい」とつぶやいた。悲劇の幕は、まだ降りていないのだ。

「俺の魔力を使いたいなら、対価を払ってもらおう」

「対価？」 男が片眉をはね上げた。

「対価は私の魂だろうか？ 死んだ後でやると言っている」

「いや、それは契約の対価だ。悪魔の魔力を使うなら、それとは別に対価を払わなければならない」

「何が欲しいんだ？」

イナゴの顔を持つ悪魔は、少し考えた後こう答えた。

「そうだな。人間の肝は美味いと聞いた。それが喰いたい」

「そんなもの対価として私に求めなくても、悪魔のお前なら簡単に手に入れられるんじゃないのか？ 人を殺すことくらい、なんでもないだろう」

男が言うと、悪魔はゆるく首を振った。

「無理だな。人間と契約を交わした悪魔は、その契約主を含め、人間に手を出すことはできなくなる。だが、対価として貰った人間はその限りではない。だからお前が人間を捕まえて、対価として俺にくれ。そして勝手に肝をとって喰う」

「なるほど分かった。先に魔力を与えてくれれば、すぐに喰わせてやる」

「いいだろう」

小さな私はまばたきもせず、家の中から男の行動を目で追った。やつは悪魔とともに少し離れた隣の家へと向かうと、その正面に立ち、杖を構えた。遠目でも口を動かして呪文を唱えているのが見て取れる。

杖の先に、よどんだ紫の光が集まってきた。それはだんだんと大きくなり、男の合図とともに勢いよくはじけた。

さつき両親を吹き飛ばした術とは、威力がケタ違いだ。木製の小さな家が、中にいた人間もろとも木っ端みじんに砕け散る。

小さな私は息をのみ、現実の私は歯を食いしばった。隣の家には、優しい中年の夫婦が住んでいた。よくヤギのミルクを分けてくれて、私のこととても可愛がってくれていた。

「素晴らしい！　素晴らしい力だっ！」

男の高笑いが、静かな村に響き渡る。

「おい、人間まで吹き飛んだじゃないか。これじゃあ肝が喰えない」

悪魔が不服そうに言う。

男は猟奇的な笑みを浮かべ、異常に興奮したような声でこう言い放った。

「心配するな。まだ人間はいる。私も新しい力をもっと試したいし、手始めにこの村を潰してしまおう」

家を吹き飛ばした音で、村に住む他の住民たちも何事かと外へ出てきた。男は笑い声を上げながらその人たちに近づいていき

「……………」

私はもう、声も出なかった。男が笑いながら村を壊滅させていく姿を、ただ見ていることしかできない。胃の辺りから何かがこみ上げてきて吐きそうになった。ミカはずっと背中や頭を撫でてくれていたけど、喉からは静かな笑い声が漏れている。

ほんの数分で村は壊滅した。

人、家、家畜。男はえり好みすることなく、全てを壊した。

家の残骸があたりに散らばり、その中にぼつぼつと赤い塊がみえる。よく一緒に遊んでいた男の子も、血にまみれて息絶えていた。

結婚間近だった近所のお姉さんとお兄さんも、強面こわもてだけど温和だったおじいさんも、うちの母のお喋り相手だったおばさんも。

殺戮の間、男はずっと笑っていた。
彼こそ悪魔だ。人の皮をかぶった悪魔。

怒りに震える私の横で、小さな私はぴくりとも動かなかった。ただ目を見開いて、呆然と外を眺めている。これはきつと夢だ、と思っ
ているに違いない。目の前で繰り広げられた光景はあまりに非現実
的で、とてもすぐには受け入れられない。

新たに得た自分の力に満足した男は、最後まで高笑いを続けながら山を下りていった。口元を血で汚したイナゴの顔の悪魔も淡々と
その後を追う。

そいつはうちの前を通り過ぎるとき、一瞬小さな私の方をじつと
見つめたような気がした。黒魔術師となった男の方は自分の力に酔
いしれていてこっちをちつとも見なかつたけれど、悪魔の方は気づ
いていたのだろうか？

遠ざかっていく2人の”悪魔”を、小さな私は真つ黒な瞳で見つ
めていた。そこに映っているのは 絶望の色だ。

頭の中に流れていた映像が止まっても、私はしばらく目をつぶっ
ていた。体はだるく、疲弊している。心臓が止まってしまったよう
な、空虚な気持ち。

涙のあとが残る私の頬をミカがかじっても、抵抗する気にならな
い。好きにすればいい。

そうしてしばらく、死んだようにぼーっとしていた。

「楽しかった？」

悲しみの炎が燃え尽きた後、私はどこかなげやりに、抑揚のない声で目の前の美しい男に聞いた。

「とても」

ミカが答える。

「久しぶりにお前の涙が見られて楽しかったよ」

「じゃあ」

私はゆっくりと、閉じていたまぶたを上げた。濡れたまつ毛が冷たい。

「約束は守ってね。王子を襲った黒魔術師を倒すまで、対価なしで私に協力してくれるって話」

低い声で言う。何もかも燃え尽き、空っぽだった私の心に、ふつふつと新しい感情がわき上がってきた。両親と村の人たちを殺したあの男に対する、怒りと憎しみ。

もちろん、今までだって男のことは憎んでいた。けどやっぱりその感情は、時とともに多少薄れていたのかもしれない。

しかし今回、ずっと思い出さないようにしてきた過去をミカに掘り返され、一から十までもう1度見せつけられて、私は男への憎悪を新たにした。

あの男を許してはいけない。絶対に見つけ出して、仇を討つのだ。

そしてあの男以外の黒魔術師も、全員この手で倒してやる。何の感情もなく他人の命を奪い、自分の欲望のまま魔術を使う黒魔術師なんて、この世からいなくなればいいのだ。

「絶対捕まえてやる」

強い決意を込めて言った。まずは王子を襲った黒魔術師だ。と、その時。めずらしくミカが声を上げて笑いだした。私の顔をくいと上げ、じっと瞳を覗き込んでくる。

「憎しみに染まったお前の漆黒の瞳は、この世の何より美しい」

ミカの赤い瞳が、炎を映したようにゆらめく。

「私の可愛いクロエ。その怒りを忘れてはいけないよ」

両手で顔を包まれて、涙の残る目尻にキスを落とされた。ミカの唇は薄く、少しひんやりしている。

他のまっとうな人間 例えばエリク王子だったら、ミカが今言った事とは逆のことを言うだろう。「怒りや憎しみを抱き続けていても辛いだだけだ。復讐なんて愚かな真似はやめろ」と。

それはもつともな意見だ。自分でも分かっている。優しかった両親は、こんなこと望んじやいないって。

だけど私が耐えられない。黒魔術師が好き勝手やっているのに、何もしていないでいるなんて。

それに、怒りや憎しみはどうしたって消えそうにない。

だからミカのように、「憎しみを持っていい」と言ってもらえる方が楽なのだ。

「感謝してるよ、ミカ。あの男がどれだけひどい事をしたのか、私にもう一度思い出させてくれて」

うつむき、ミカの肩におでこをこつんと置きながら、そう呟いた。

「え、またですか？」

隊長に声をかけられたのは、私が研究室の掃除をしていた時だった。

「私、おとといやったばかりですけど」

戸惑いながらそう答える。隊長は私に、また「夜の警備につけ」と言ってきたのだ。

一晩通しての警備はなかなか体力がいる。もちろん睡眠時間も少なくなるし。だから他の魔術師たちは、週に1度くらいの周期で“夜勤”にあたっているはずなのだが。

「ぐだぐだ文句を言うな。隊長わたしの決定は絶対だ」

尊大な態度で言うと、隊長はつかつかと研究室を出ていってしまった。

黒魔術師は絶対に捕まえてやる、と昨日決意を新たにしたばかりだから夜の警備は別にいいのだけど、大変な仕事ばかり私に回すのはやめてほしいな。確か今日は隊長が夜勤のはずだった。自分が休

みたいがために、その仕事を私に押し付けたのだろう。本当、嫌な上司だ。

心の中で隊長に毒を吐きながら、私は同じ部屋の中にいるスザンナの方をちらりと見た。自分の机に座って黙々と作業をしている。騎士団へ渡す傷薬を作っているのだろう。たまには彼女も真面目に仕事をするらしい。

以前はことあるごとにつつかかかってきたスザンナだが、今は基本的に私を無視している。しかしたまに目が合つと、背筋も凍るような恐ろしい形相でこつちを睨んでくるのだ。

私を敵視している暇があったら、普段エリク王子の近くでお世話をしている侍女たちや、将来の妃候補と言われている上級貴族のお嬢様たちに嫉妬していたほうが有意義だと思っただけだなあ。

その日の晩、私は隊長から命令された通り、夜の警備にあたった。濃紺の空は晴れていて、月や星がはつきりと見える。静かでいい夜だ。いいのか悪いのか、今日も何も起こりそうにない。

犯人は結構、慎重なタイプのような気がする。最初の暗殺未遂から今まで全く姿を現さなかったことからしてもエリク王子の殺害は急ぎの用件ではないようだし、こうして警備を固めて待つていても、犯人はなかなかやって来ないんじゃないだろうか。

現在、夜の警備の人数は普段の2倍になっており、所によってエリク王子の寝室付近など　は3倍の人員がつき込まれている。しかしこれがずっと続くわけではない。安全が確認されしだい、元の警備の人数に戻るわけで……

犯人はもちろん、そのタイミングを狙うだろう。私はだったらそ

うする。

「すみません、カレル副団長を見ませんでしたか？」

私と同じく城の外の警備に当たっていた魔術師に声をかけた。研究棟の中で見かけた事のある、確か第4か第5辺りの魔術師だ。

私より10ばかり年上に見える彼女は、

「副団長はエリク王子につきつきりよ」

と教えてくれた。お礼を言ってその場を離れる。

魔術師団を統率する1番偉い人が団長。その下が副団長だ。さらにその下には各隊をまとめる隊長、副隊長がいて、私たち平隊員がいる。

つまりカレル副団長というのは、魔術師団のナンバー2の位置にいる人物である。私のような平隊員ではほとんど接する機会もないし、実際喋ったことなどなかった。入団式の時に皆の前で話している姿を見たことがあるだけ。

しかし私は今、その人に話したい事がある。本当はまずうちの隊長に話をして、隊長から交渉してもらった方がいいのだろうが、あの隊長が私のために動いてくれるとは思えないから、こうして自分で会いに行くしかないのだ。

果たして副団長が会ってくれるかは分からないけど。

城の中に入って、奥へ奥へと進む。

すると、廊下の途中で2人の騎士が立ちふさがっていた。ここから先は王族の居住区で、簡単には立ち入れないのだ。

「あの、すみません。魔術師団のカレル副団長に用があるのですが、

通してもらえませんか」

体格のいい2人の騎士を見上げて、私は少しビビりながら声をかけた。

彼らは私の格好を確認すると　王国魔術師が着ているローブには、ちゃんと国の紋章が入っているのだ　少し考えた後で、「ついて来い」とあごをしゃくった。1人はその場に残り、1人は奥へと歩いていったので、私も歩いていった方の騎士に続く。

彼との歩幅の違いに慌てつつ、小走りでしばらく進むと、なんだか見たことのある景色が目に入ってきた。この前来た、エリク王子の私室が近いのだ。

王子やカレル副団長がいるらしき部屋の扉の前には、また別の騎士が2人いた。私を案内してくれた騎士の人が、その騎士たちに小さな声で耳打ちする。「カレル副団長に用があるらしい」とかなんとか。

部屋の前にいる騎士は、私の方をちらりと見た後で扉に向き直り、上品に2度ノックをした。

「お話中失礼します。カレル副団長に用があると、魔術師が来ております」

扉の外からよく通る声でそう呼びかけると、中から「入って来い」と反応があった。エリク王子の声だ。

私はじゃっかん緊張しつつ、扉を開けて待っていてくれる騎士の横を通り過ぎ、王子の私室へと入っていった。少し心配したのだが、まだ夜も浅いのでエリク王子は起きていたようだ。

彼は中央に置かれたソファーに座っていたが、こちらを見た瞬間、少しだけその目を見開いた。訪問者が私だった事に驚いたようだ。

同じく中央のソファーには、テーブルを挟み、王子と向かい合う

ようにしてカレル副団長が座っていた。艶のある灰色の髪を肩の辺りで切りそろえていて、細身の体は長いローブですっぽりと覆われている。整った顔に眼鏡をかけており、どこか冷たい印象だ。

「君は？」

その氷のような瞳が、鋭く私を射抜く。

「あ、あの私、第3隊に所属するクロエ・デュオラと申します。副団長にご相談したい事があるのですが、今よろしいでしょうか」

偉い人と話をするのは神経を使う。私はおどおど相手の機嫌を伺った。

が、カレル副団長の機嫌はあまりよろしくないらしい。彼は厳しい視線を私に向けると、

「私に用があるのなら、また明日出直してきなさい。ここは王子の私室ですよ」

と言い放った。しかし注意されることは覚悟で来たので、それくらいではへこたれない。

「すみません。でも少し急ぎの用件で……」

「まあいいじゃないか。とにかく座れよ、クロエ」

助け舟を出してくれたのはエリク王子だ。さすが。

カレル副団長がとがめるような視線を王子に向けたけれど、全く気にしていないみたい。立っている私を指し示し、副団長に言う。

「こいつがああ12年前に起きた虐殺事件の生き残りだ。この前話

「しただろ」

「ああ、彼女が」

私を見るカレル副団長の目に、少し憐憫の色が宿った。「氷の心を持つている」とか「感情がない」とか、影で様々なうわさがささやかれている副団長だけど、意外と優しいところもあるのかもかもしれない。

私は「失礼します」と断って、彼の隣に腰をおろした。

「で、カレルに話って？」

高そうなティーカップで紅茶を飲みながら、エリク王子が私に問う。

「えっと……エリク王子の暗殺未遂事件のことでちょっと。まだ犯人の目星はついていないんですよね？」

「それを君に教える必要はありません」

「ああ、全くついてない」

カレル副団長の言葉をさえぎって、エリク王子が教えてくれた。

副団長は目をすがめたが、王子は「いいだろ、別に」と肩をすくめた。

2人のやりとりを気にせず、先を続ける。

「私、王子のお力になれないかと色々考えたんです。それでいい事を思いつきました」

「期待はしてないが、言ってみろ」

エリク王子がうながす。副団長も全然関心がないような様子で、紅茶をかき混ぜていた。

彼らから見れば、私はまだひよつこの新人魔術師。だから当然そういう反応にはなるだろう。半人前が出しゃばるな、と怒鳴られなかっただけマシだ。

私はひざに手を置いて、前に上半身を乗り出すようにして話した。

「このまま待っていても犯人の黒魔術師はやってきません。だから、

罨をはって犯人をおびき寄せらるんです。私に王子の影武者をさせて下さい」

「影武者？」

首をひねる王子に、私は自分が考えた作戦を伝えた。

影武者と言っても四六時中ではなく、犯人がやってくる可能性が高い夜の間だけのもの。魔術を使って私がエリク王子に変身し、王子の寝室で、王子の代わりに眠るのだ。

そうすれば、犯人がやってきても襲われるのは私。別の場所で眠る王子に危険は無い。

「いつそのこと犯人らしき人物を捕まえたとか言っただけで、警備の数は元に戻した方がいいかもしれません。犯人が出てきやすいように。その上で私がおとりになります」

説明が終わると、エリク王子は険しい顔で、カレル副団長はびっくりしたような顔でこっちを見た。

「驚いた。なかなかいい作戦です」

副団長の言葉に、私は照れたように頬をゆるませた。

この作戦の是非を相談する相手として、カレル副団長を選んだのは正解だった。私が庶民出身でも新人でも、彼には関係ない。いい提案をすれば採用するし、悪ければ却下する。彼は実力主義者なのだ。

これがうちの隊長ならこうはいかない。あのヒゲオヤジは、私の提案を聞く耳なんて持ってないからだ。お前は掃除でもしてると一蹴されて終わり。

柔軟に私の話を聞いてくれそうな相手として、魔術師団の団長も

候補に入れていた。しかし団長はもう、よぼよぼのおじいちゃんでは昔は凄腕の魔術師として名を馳せたらしいけど　魔術師団団長という地位も名誉職みたいなものなのだ。実権を握り、魔術師たちをまとめているのは副団長の方。

エリク王子の警護の魔術師側の責任者もカレル副団長だ。だったら直接副団長に話をつけた方が早い。

直接、ということ言うなら、直接エリク王子だけにこの『おとり作戦』を話してもよかった。

しかし私の予想では、彼は絶対

「駄目だ。俺は反対だ」

王子が厳しい声を出す。ほら、やっぱり。

「女をおとりに自分は安全な場所で寝るなんて……」

そう言っつて首を振る。王子は優しいのだ。

「エリク王子、私はただの女じゃないですよ。攻撃も防御もできる魔術師なんです。おとり役くらい、こなしてみせます。任せて下さい」

「王子、私もこの作戦を試してみたいと思っています」

カレル副団長も私に味方してくれた。

「現状、犯人も犯人の目的も分からず手詰まり状態ですから、なんとかこれを打開させたい。おとり役に危険はつきものですが、彼女もある程度は自衛できますし、もちろん私も彼女を守ります。みすみす犯人に殺させるような事はしませんよ」

エリク王子はしばらく渋っていたが、最終的に副団長の説得に応じた。

王子も、早く犯人を捕まえなくてはならない事は分かっているのだ。王族を暗殺しようとした犯人を野放しにしたままでは国民も不安がるし、諸外国からもなめられてしまう。

「この作戦を教えるのは、ごく一部の人間に限定したほうがいいと思います。騎士や魔術師であっても、全員に教える必要はないかと」

私がそう言うと、カレル副団長もうなづいた。

「内部に犯人がいたり、密偵がいる可能性も捨てきれいていませんし、悪気なく情報を外へ漏らしてしまうという事もありますからね。うわさ好きの軽率な者はどこにでもあります」

さつきから不機嫌になっている王子を無視して、副団長は作戦を詰めていった。

「作戦は明日からさつきで始めましょう。まず『王子を襲った犯人らしき人物を捕まえた』という情報を流し、その上で夜の警備の人数を減らし、厳戒態勢を解いたように見せかけます。犯人はきつとその隙をつくでしようから、我々はエリク王子に成り済ましたクロエさんの元へ、のこのことやってくる犯人を待てばいい」

そこで勝利を確信したように唇の端を上げて笑うと、さらに続けた。

「作戦を伝えるのは、信頼のできる一部の騎士と魔術師、それに侍女と……第一王子と国王にも伝えておいたほうがいいですね。もち

ろん全員に作戦を口外しないと言わなければなりません。騎士団の警備責任者のほうには、私から説明しておきましょう。騎士たちもきつとこの作戦に乗り気になると思いますよ」

カレル副団長はそう言つて、私に向かつてほほ笑みかけた。珍しく役に立つ物を拾ってきた駄犬を褒める時に向けるような笑みだつたけど、「氷の心を持っている」といわれるこの人でも笑うんだなと私は感心していた。

エリク王子がじつとりとこちらを見つめながら言う。

「せめて誰か他の……クロエ以外の者におとりを頼めないか？ いても俺についてくれてるセドリックって騎士なんかいいと思うけど。強いし。クロエはまだ新人だし、何か頼りないんだよな。殺されなにか心配だ」

「エリク王子に心配してもらえるなんて光栄ですが、私のことは気にしないで下さい。こう見えて結構強いんですから。それに私は、黒魔術師を倒すために魔術師になったんです。おとり役はぜひ私にやらせて下さい」

私の強い想いが伝わったのが、エリク王子は諦めたように「わかった」とつぶやいた。

そして次の日。

昼間の仕事中、研究室に入ってきた隊長が皆を集めて言った。

「エリク王子を襲った犯人が捕まったらしい。正確に言っとまだ証拠はそろっていないから、犯人ではなく容疑者だが」

「え、本当ですか？」

部屋にいた隊員たちは急な展開に驚いたようだが、しばらくすると皆「よかった」と胸を撫で下ろし始めた。

隊長は続ける。

「だがまあ、そいつが犯人で間違いないだろうという事だ。今日から夜の警備も通常通りに戻すからな」

「犯人は誰だったんです？ エリク様を襲った不届き者は！」

スザンナが鋭い声を上げた。隣にいたダンが、なだめるように彼女の肩を撫でる。

私は密かにスザンナの反応を見ていたけど、警備が薄くなると分かってほくそ笑むとか、偽の犯人が捕まったことを鼻で笑うとか、そういう分かりやすい反応はしなかった。

本当にエリク王子を襲った犯人のことを怒っているように見えるが、うがった見方をすると演技にも見えてくる。

「容疑が固まるまで、犯人の名前は公表しないそうだ」

その口ぶりからすると、隊長は本気で容疑者が捕まったと思っていたようだ。隊長クラスだと、もしかしたら全員に作戦が知らされているんじゃないかと思ったが違うらしい。

カレル副団長は昨日、『信頼のできる一部の騎士と魔術師』に作戦を知らせると言っていたが、そこにうちの隊長が入っていない事に、私は意地悪にも喜んでしまった。副団長は見る目があるな！

「クロエ」

なーんて事を考えていたので、突然隊長に名前を呼ばれて、私はびっくりと飛び上がった。

「な、何でしょうか？」

「お前はこれから数日、この研究室には来なくていい。代わりにカレル副団長のところへ行ってこい。部屋を掃除してほしいそうだ」
「掃除ですか……」

私は、なるべく嫌そうにみえる顔を作った。

隊長がせせら笑う。

「魔術師を辞めて、いつそ掃除婦になったらどうだ？　くれぐれも副団長に失礼なことをしてくるなよ」

「分かってます」

仏頂面でそう言うと、仕事に戻る仲間たちを尻目に、私は一人荷物をまとめて研究室を出ていった。しかし、向かうのはカレル副団長の部屋ではない。寮の自分の部屋だ。

実は、副団長からの呼び出しは周りをあざむくためのカモフラージュ。
ジユ。

今日の夜から私は王子の身代わりとなって王子の寝室で眠ることになるわけだが、本当に爆睡してしまつては、犯人がやって来た時に簡単に殺されてしまう。寝るのではなく、寝たフリをしないと行けないのだ。

そのためには事前にしっかりと睡眠をとっておく必要があるから、私は昼間の仕事を免除された。「昼は家に帰って寝るように」と、昨日副団長に言われたのだ。

これからしばらく、犯人が現れるまではこういう生活が続くだろ

う。

たつぷりと睡眠をとった後、日が完全に沈んだところに、私はエリク王子の寝室へと向かった。王子が話を付けてくれたのか、今回は廊下の途中で警備をしている騎士のところも、あっさりと通れた。

「本当にやるんだな？」

優美な調度品に彩られた無駄に広い部屋の中、天蓋付きのベッドの側に立っていた私はエリク王子に詰め寄られていた。もちろん、「おとり」を本当にやるんだな、という意味だろう。

「はい、頑張ります」

につこりと笑って言うと、王子は軽くため息をついた。能天気な子供を見るような目でこつちを見てくる。失礼な。

「どうも頼りないんだよな、お前は」　そこまで言うところりと後ろを振り返って、

「クロエの事、ちゃんと守ってやってくれよ。任せたぞ」

同じ部屋の中にいた、数名の魔術師と騎士たちに向かって言った。彼らは今回の作戦の事を知らされた、精鋭部隊のようなもの。皆それなりの才能と戦闘経験を持った人たちで、この中にいると新米の私は浮いてしまう。

「大丈夫ですよ。それより、貴方様はご自分の心配をなさって下さ

い

王子の隣に立っていたカレル副団長が、部屋の照明を受けて淡く光るグレーの髪を耳にかけながら言った。

そして私の方に向き直ると、

「さて、それでは君に変化^{へんげ}の術をかけましようか。自分で出来ますか？」

と、聞いてきた。私は困ったように眉を下げ、おとなしく首を横に振る。

自分自身に術をかけるのは難しいのだ。副団長もそれを分かった上で「自分で出来るか？」と聞いてきたのだらうし、ここは未熟な新人らしく、上司にお願ひした方がいい。

この場でミカを頼るわけにはいかないだし。

「では私がやりましょう。まず、これを飲み込んで下さい」

そう言ってカレル副団長が差し出してきたのは、金糸のような一本の髪の毛。きつとエリク王子のものだ。

変化の術を使う時は、姿を変える相手の体の一部を自分の体内に入れなくてはならないから。

でも、髪の毛って……

「一本でもきついですね」

「水で飲み込んでしまいなさい」

躊躇^{ちゅうちゆ}する私に、副団長が水の入ったグラスを渡してくれた。いや、水があっても確実に喉にひっかかるよ、これ。

顔をこわばらせて金色の髪の毛を見つめる私に、エリク王子が申

し訳無さそうに言った。

「なんか悪いな。髪の毛食うなんて気持ち悪いだろ？ こっちのがマシなんじゃないか？」

腰に携えていた短剣を取ると、その刃先を自分の指に向ける。周りにいる騎士たちが止めようと身を乗り出してきたけど、その前にエリク王子は自分の指先を小さく切っていた。

ぷくりと溢れ出た1滴の血を、私が持っていたグラスに落とす。王子の血は水に溶けて透明になった。

「傷、大丈夫ですか？」

あわあわと恐縮しながら聞いた。王子に血を流させてしまうなんて。

「問題ない。……大丈夫だって！」

前半は私に、後半は魔術で傷を治しにかかったカレル副団長に向かって王子が言った。副団長の術によって、エリク王子の傷はあっという間になくなってしまふ。

小さな傷を周りから過剰に心配されて、王子は少し恥ずかしそうだ。

笑ってしまいそうになるのをこらえて、私は一気にグラスの水をあおった。血の味は感じない。

「では術をかけますよ」

カレル副団長が杖をこちらに向けた。魔力をたたえて、先がぼつと光っている。

副団長が呪文を唱え始めると、私にも変化があらわれた。強い光に覆われて、体のあちこちがむずむずし始めたのだ。なんだかちょっと気持ち悪い感覚。

詠唱が進むにつれて私の体はだんだんと作り変わっていき、数十秒ののち、光が消え、呪文がやむと同時に変身も終わった。

「うわ……俺だ」

目の前に立っているエリク王子が微妙な表情をして言った。

さっきまで見上げていた彼と、今では視線の高さが同じだ。

向かいの壁にかかっている大きな鏡へ視線を向ける。輝く金の髪に青い瞳。中性的な格好良さを持ったエリク王子が2人、そこには映っていた。

「完璧ですね」

そう言った自分の喉からも、なめらかなエリク王子の声が出た。

私の姿はエリク王子そのものだった。外見も服も声も。中身だけが違う。

カレル副団長が魔術を使って、私の服をゆったりとした寝間着に変えた。驚くほど手触りのいい生地だ。

「なんか、すげー変な感じだ。目の前に自分がいるって」

私の方をまじまじと見つめながら、感慨深げに王子が言った。その隣ではカレル副団長が杖を掲げて、また何やら呪文を唱えている。その杖の先から放たれる魔力の量に、私は軽く瞠目した。術が完成すると、副団長はこちらへ顔を向けて言う。

「普段通り、寝室の周りにはシールドを張っておきました。あまり隙だらけにしておくとは逆に怪しまれて、畏だと気づかれそうですから」

副団長の言う通り、壁や天井に沿うようにして、四角いシールドがこの部屋を守っていた。

シールドと言っても様々な種類があり、誰かが触れれば術者にそれが伝わるセンサーのようなものや、入った途端に別の場所へ飛ばされてしまう、転移陣を組み合わせたようなものなど色々。

そして今ここに張られているシールドは、外からの敵や攻撃を跳ね返す、1番一般的なものだ。

しかし、その強度がすごい。副団長につくったシールドには厚みがあり、魔力の密度も濃いのだ。これをつくるだけで多くの魔力が

必要になるし、それをさらに朝まで維持するとなると……普通レベルの魔術師では無理だ。

失礼だとは思いながらも、私は心の声を抑えられなかった。

「副団長って……ほんとに人間ですか？」

私の言葉に、部屋の中にいた男の魔術師が声を殺して笑う。確か第1隊の隊長だ。彼もきつと、常日頃から私と同じような思いを抱いていたのだろう。魔力のある者は、相手の魔力の大きさをなんとなく感じとる事ができるのだ。

カレル副団長は怒るでもなく、フツと笑みさえこぼして答えた。

「残念ながら普通の人間です。悪魔と契約したりはしていませんよ。卑しい悪魔の力を借りるなど、絶対に嫌ですからね」

その口ぶりから、副団長のプライドの高さがちらりと垣間見えた。彼のように自分に自信を持っている人は、悪魔と契約を結ぶなんていう行為は身の毛もよだつ話なのだろう。下劣だと思っている悪魔の魔力が自分の体内に入ってくるなんて、と。

こういう人は絶対黒魔術師にはならない。

「でも本当にすごいです。副団長なら、黒魔術師相手でも対等に戦えるんじゃないでしょうか」

感心しきって聞いた。

普通、白魔術師が黒魔術師を相手に戦う時は、複数対1が大原則だ。白魔術師は魔力の量で黒魔術師に劣るので、1対1では簡単にやられてしまうから。

だが副団長なら、黒魔術師相手でも一人で戦えるかもしれない。それほど強い魔力を持っていた。

「さあ？ 1対1では戦ったことがないので分からないですね。負けるつもりはないですが……」

静かな声には、しかし確かな自信がにじんでおり、生まれ持った才能と魔力の量がそれを裏づけている。

だが、彼はきつとたくさん努力も積み重ねてきたはずだ。強い魔力を完璧に扱うのは、すごく難しいことだから。

私がカレル副団長の魔力量や技術に感服している間に、第1隊の隊長含む他の魔術師たちは、何やら作業を進めていた。持っていた大きくて真っ白な布を広げ、床に敷き始めたのだ。

布には転移陣が描かれている。

副団長が言った。

「この分厚いシールドですら、黒魔術師は破ってくるでしょう。前に王子の寝室へ侵入された時も破壊されてしまったからね。しかし簡単には壊せないはずです。早くても数十秒はかかる」

そこまで言う副団長は、ごそごととロープの中を探り、2つの透明な石を取り出した。手のひらでぎゅっと握れるくらいの大きさで、美しくカットされているものだ。

副団長はその内の1つを私に手渡すと、

「犯人がシールドの破壊に手間取っている間に、クロエさんはそれで私たちを呼び出して下さい。その石は魔石で、片方に魔力を込めれば、もう片方が光るのです」

魔石というのは、簡単に言えば不思議な石。

一般的なのは魔力を貯めておくことのできる石で、魔術師だった

ら2つや3つは普通に持っている。しかし今渡されたものはそれとは違う、特殊な性質を持つものらしい。

私は透明な魔石を手のひらで転がしながら、うなづいた。

「犯人が来たことに気づいたら、私はこの魔石に魔力を込めればいいんですね。そうすれば副団長たちに合図が送れる」

カレル副団長たちは警護のため本物のエリク王子が眠る部屋の近くに控えていなければならぬから、私のいる寝室とは少し離れたところで待機することになっている。しかしこれがあれば、離れていても黒魔術師の襲撃をすぐに知らせられる。

副団長もうなづいた。

「そうです。クロエさんを一人で戦わせるわけにはいきませんから、石が光れば、我々は即刻ここへ飛んできます。この転移陣を使って」

そう言っただけで転移陣の描かれた布を指差した。おそらく副団長たちの控え室にも同じものが用意されているのだろう。これを使えば廊下をばたばたと走ってくる必要もない。移動は一瞬で済む。

しかしこのままでは陣の描かれた布が目立ちすぎるので、副団長が透過の術をかけた。すると布は目視できなくなって、そこに見えるのはじゅうたんだけになる。

このおとり作戦を思いついたのは私だけど、細かいところを詰めたのは副団長だ。私では魔石とか転移陣とか思いつかなかったかもしれない。

犯人を迎え撃つ準備が整うと、

「では、健闘を祈ります」

「気をつけるよ。犯人の姿が見えたら、すぐカレルを呼ぶんだぞ。」

途中で寝るなよ」

カレル副団長とエリク王子は照明を消して寝室を出ていき、この照明も魔石を使ったものだ。他の魔術師や騎士たちもそれに続いた。

部屋の外の廊下では2人の護衛騎士が立っけてくれているはずだが、扉を閉め切った寝室の中に残ったのは私一人。少し緊張してきた。

王子が普段使っているこの寝室は広すぎて落ち着かない。

寮の狭い部屋が、圧迫感のある低い天井が恋しい。窮屈な隙間に入りたがる猫の気持ち、少しわかるような気がした。

ずっとこうして突っ立っている訳にはいかない、私はいそいそとベッドに乗った。驚くほど大きく、やわらかなベッドだ。適度に体が沈んで心地いい。

天蓋から垂れる薄い飾り布をまとめて、柱に縛り付ける。視界をさえぎらないように。

右手に杖、左手に魔石を持って、ふかふかのベッドにもぐりこんだ。とりあえず仰向けになって、高い天井をぼうっと眺めてみる。

……暇だ。

すごく暇だ。

昼間に寝たので眠気はないが、一晩中このままなのは結構辛い。しかし私はおとりだ。寝ているフリを続けなければならないので、暇つぶしに本を読むわけにもいかない。何もせずにベッドで横になって、いつ来るか分からない犯人を待つしかないのだ。

「ミカ」

とりあえず、暇つぶしの相手としてミカを呼んでみた。

エリク王子の声が自分の喉から出てくることには、まだ慣れない。

「ミカー」

廊下にいる護衛の騎士に聞こえないように、声を抑えて言う。

と、私がまばたきをしている内に彼は現れた。淡い月明かりを反射して白い肌と濃い金髪がやわらかく光っており、その紅い瞳は薄闇の中でいつそう目立って見えた。

ミカはどこかよそよそしく冷たい表情で、こちらをねめつけてくる。

「な……なに？」

私はおどおどと問いかけた。ミカはいつも口元に薄い笑みを浮かべて余裕しゃくしゃくという顔をしているのが常だから、こんな表情を見るのは初めてと言っててもよかった。

「ミカ？ どうしたの？」

上半身を起こしてミカにそう質問すると、彼はさらに眉間のしわを深くした。そして不機嫌な声で言う。

「その声でミカと呼ぶな。殺したくなる」

それだけ言うとミカは姿を消してしまった。

私が「ちよっと待ってよ。私今ひまだから、話し相手になって」と小さく叫ぶと、ミカは闇の中から声だけで

「お前が元の可愛いクロエに戻ったらね」

と、返してきた。どうやら彼は、エリク王子の姿をした私が気に入らないらしい。男の太い声で エリク王子の声は、男性にしては高めだけど 「ミカ」と呼ばれるのが嫌だったのかも。しかし今、元の姿に戻るわけにはいかないし……

私はおとなしくベッドの中に戻った。

犯人よ、早く現れてくれ、と願いながら。

が、結局その晩、犯人が姿を現すことはなく。

私はただひたすらぼーっとしながら、人によっては天国のようなしかし私にとっては地獄のような数時間を過ごした。

犯人は翌晩もやって来ず、これがしばらく続くとききついなあ、と思っていたのだけど、作戦を始めてから3日目の夜にいいよ事態は動いた。

前2日と同じように私がエリク王子に変身して眠ったフリをしていると、ベッドの隣にふ、とミカが現れた。今日は機嫌が良さそう。

「来たよ」

しかしそれだけ言うとすぐに消えてしまう。

だが私はその言葉の意味を即座に汲み取った。 「犯人が来たよ」という意味だ。

さっきのミカの楽しそうな顔からして間違いない。今は姿が見えないけれど、きっとまだこの部屋の中にいるのだろう。戦いを見物するつもりだ。

私はベッドの上に横たわったまま、薄目を開けてバルコニーの方を見た。ミカの言う通り、魔力を宿した何者かが、だんだんこちらに近づいてくる。あらかじめカーテンは開けておいたから、バルコニーに降り立った犯人の姿は窓ガラスを通して確認することができた。

黒いローブで全身を包み、フードをかぶって顔を隠している。身長はそれほど高くなく、男か女かも分からない。

私は布団の中で魔力を握り直したが、まだ魔力は込めなかった。

犯人が杖を窓に向け、シールドを壊しにかかった瞬間、今まで普通の白魔術師レベルだったそのいつの魔力が、突然ぐんと跳ね上がった。

(やっぱり犯人は黒魔術師か)

ヤツは今、契約している悪魔から力を借りているのだ。人間では有り得ない量の魔力を。

黒魔術師のやっかいなところは、こうやって強大な魔力を使わない限り、その正体を見抜けないということところだ。彼らは普通にしていれば、その辺の白魔術師と変わらないのだから。

確実に見分けるには、裸にさせて胸の刻印の有無を調べるしかない。

犯人はカレル副団長のつくったシールドに、大量の魔力を注ぎ込んでいった。

やがて、シールドが犯人の魔力に浸食されると、

《ドレクト》

犯人の放った短い呪文1つで、さあと空中に霧散していった。

私はまだ、魔石に魔力を込めない。しかし反対の手ではしっかりと杖を握り直した。

シールドを消すと、犯人は短距離の空間移動術を使って、窓ガラスを割らずに室内に侵入してきた。いつ攻撃を受けても大丈夫なように、私は体内で魔力を練り上げ始める。

が、犯人は一向に攻撃を仕掛けてはこない。音をたてずにゆっくりこちらへ近づいてくると、私が横たわっているベッドのすぐ側で足をとめた。

殺すつもりなら、さっさとその目的を遂げて逃げればいいのに。

犯人の行動に小さな違和感を感じた。

そういえば最初にエリク王子が襲撃された時も、犯人は室内に侵入しておきながら、王子に気づかれるとすぐに逃げ出したという。

そこまで接近したなら、普通は相手を殺してから逃げると思っけど。姿を見られたならなおさら。

(犯人の目的はエリク王子の暗殺ではない?)

私は薄く目を開けたまま、暗闇の中の犯人を注意深く見守った。

深くかぶったフードのせいでまだ顔は見えない。

彼、あるいは彼女は彼女は仰向きに寝ている私　エリク王子の胸のあたりに杖を向け、長い呪文を唱え出した。

(この声……)

私はその、くぐもったような細い声に聞き覚えがあった。

犯人の杖の先が小さく光り出す。犯人はその光を使って、私の胸の上で小型の魔法陣を描き始めた。円と多角形、六芒星を組み合わせた図の中に、魔術文字をちりばめていく。

魔術文字を解読すれば、これが一体どんな魔法陣なのかが分かる。

(これは……)

私は眠っているフリをやめて、瞳を大きく見開いた。犯人はエリク王子を殺すつもりはなかった。少なくとも肉体を破壊するつもりはなかったのだ。

この魔法陣は、体ではなく心に作用するもの。

これは”恋の呪い”だ。

意中の相手の気持ちが無理矢理自分へと向ける魔法薬　いわゆる惚れ薬というやつだが、それを作るのは結構簡単で、お金とツテさえあれば、一般庶民でも手に入れることが出来るのだ。

しかし惚れ薬の効き目は長くは続かない。出来のいいものに当たっても、1日2日、相手の心を縫い止めておくのがせいぜい。

一方で”恋の呪い”の効き目は、惚れ薬とは比較にならない。呪いをかけられた者は、永遠にその心を相手に奪われてしまう。”呪い”というだけあって、恐ろしい術なのだ。

だが、術をかけるのは容易なことではない。相手の精神を壊し、ねじ曲げるのだから、当然、術の行使には多くの魔力が必要になってくる。

”恋の呪い”は色々な魔術書に書いてある有名な術だが、実際に使える白魔術師の数は限られている。もちろんそれが黒魔術師となれば、話は変わってくるが。

悪魔と契約した黒魔術師なら、”恋の呪い”くらい簡単にやってみせるだろう。

今、私の目の前にいる犯人も、着々と術を完成させつつあった。私はもう目を開けているというのに、術に集中しているのか、気づく様子はない。

そこで犯人の描く魔方陣の中に、突如『スザンナ・クリアネス』という文字が躍り出た。

スザンナ　私が苦手としている同僚の名だ。

続いて犯人は、黒いローブの中から1本の糸を……いや、髪だ。

1本の長い髪を取り出した。暗闇の中で色までは判別できないが、きつとスザンナのものだろう。

この呪いは、エリク王子の心をスザンナのものにするための術なのだ。

「無駄ですよ」

あと少しで術が完成するという間際になって、私はやっと犯人に声をかけた。注意をそらしたことで、犯人の描いていた光の魔方阵は夜の闇に溶けて消えた。

「私はエリク王子じゃありませんから」

そう言っただけで自分にかかっていた変化の術を解く。王子に代わって現れた私の姿を見て、犯人は驚いたように肩を揺らした。しかし、すぐにきびすを返すと窓の方へと走っていく。逃げる気なのだろう。

「逃げるのも無駄です。私はもうあなたの正体に気づいてますから」

犯人の足がぴたりと止まった。

「エリク王子を狙う黒魔術師はあなただったんですね……ダン」

私が静かにそう言うと、犯人　　ダンはゆっくりと振り返った。知られたからには生かしておけない、という雰囲気だ。

フードを取り去った彼の顔は、びっくりするほど無表情だった。もともと表情のある方ではなかったが、今はとりわけ色が無い。眠そうな瞳は何も映していないかのように空虚で、暗い。何を考えているのか読めなくて少し恐ろしい。

今まで対峙してきた黒魔術師は、たいていこういう時は歪んだ笑

みを浮かべていたのだが……。

「クロエか」

ダンが抑揚のない声で言う。

「どうしてこんな事を……。スザンナに頼まれたんですか？」

1番最初に思いついた可能性を言ってみた。

しかし、それは外れたらしい。

「これは僕の意志だ」

「スザンナのため？」

「そう」

スザンナの話になると、わずかにダンの声が高くなった。彼は続ける。

「スーはエリク王子に振られてからすっかり落ち込んでしまっ……可哀想で見えられなかった。だから悪魔と契約した。エリク王子に”恋の呪い”をかけるために」

スザンナは王子に夢中だったから、確かに振られた時は傷つき、落ち込んだだろう。

ただ、私をねずみに変えてみたりと、他人をいびる元気はあったように見えたが。

「スーの望みを叶えてあげたかった」

そう呟くダンの声からは、スザンナへの確かな好意が読み取れる。

そしてそれは、単なる幼なじみへの情を超えていた。

「スザンナのことを好きなの？」

「好きだよ。愛してる」

私の疑問に、ダンはあるさりと答えを返した。思わず、眉間にしわを寄せてしまう。

だって相手はスザンナなのだ。ツンとつり上がった目尻に桃色の唇。顔は可愛いと思うけれど、性格がキツすぎる。一体どこに惚れたというのか。

「ちょっと疑問なんですけど……スザンナのどこが好きなんです？」

まさか憎き黒魔術師と恋愛の話をする事になるうとは思わなかった。

部屋の空気はゆるんだようにも感じるけど、その下には相変わらず、張りつめた緊張感がただよっている。ダンが発する殺意も消えてはいないから、私はしっかりと杖を握りしめたまま話を聞いた。

「スーは僕に無いものをたくさん持つてる。自分の意見がちゃんとあって、何にも流されず、意志が強い。常に前向きで真っ直ぐで……とても一途だ。表情豊かで見えていて飽きることはないし、好きにならない理由がない」

なるほど確かに、ダンとスザンナは正反対だ。ダンはおとなしくて暗い感じだから、スザンナの明るいところ、強いところに惹かれる気持ちも分かる。

ただ、入団当初から彼女にずっといびられ続けてきた私にとっては、ダンの言う『自分の意見がちゃんとあって……』という長所は”わがままで協調性がない”という短所に見えるし、『常に前向き

で……』というところも、場合によっては”楽観的で無責任”という風に見える。表情も豊かだが、同時にヒステリーも起こしやすいかも……

しかしそれも、私がスザンナに苦手意識を持っているからなのだろうか？ 偏見をなくして見てみれば、彼女は素晴らしい人なのかも。

そこまで考えて、いやいや……と首を振った。やっぱり私は今のスザンナを好きになれない。

だけど人の好みというのは、まさに人それぞれ。私が好きになれない相手をダンが好きになるのも、別におかしなことではない。

それにスザンナは、私の前でだけ意地悪だったのかも。庶民出身で魔術師になった私が気に入らないようだったし。

ダンの前では、私の知らない一面を見せていた可能性もある。どちらにしろ、私が気づけなかったスザンナの魅力に、ダンには気づけたのだろう。

「でも……」

まだ腑に落ちないことがある。私は月明かりを背に立つダンをじっと見つめて言った。

「スザンナのことが好きなら、どうして彼女に”恋の呪い”をかなかったんです？ そうすればスザンナはエリク王子への想いを忘れ、ダンのことを見てくれるのに」

愛する人と両想いになりたいと思うのが、普通の感情ではないのだろうか。私にはいまいち、異性に対する恋とか愛とかいう感情は分からないけれど。

ダンは『何を言っているんだ』というように目を見開き、声に怒

りさえにじませて反論した。

「そんなことしたらスーが可哀想じゃないか。」恋の呪い”は、心をねじまげてしまっただぞ。スーの心を……エリク王子を想う気持ちを壊してしまうなんて、そんなひどいこと僕にはとてもできない。僕は自分が幸せになれなくてもいいんだ。スーさえ幸せになつてくれればそれで」

ダンの真剣な表情に、私は思わず謝りそうになった。自己犠牲の塊のような彼が、なんだか正しく思えて。

しかしすぐにそんな気持ちは消え去る。”恋の呪い”をかけたらすザンナが可哀想？ だったらエリク王子は？ 王子の心は壊れたってかまわないと？

私の心にゆらりと怒りの火がともる。やはり黒魔術師になろうとするやつは、皆どこかがおかしい。他人を思いやる気持ちが欠けているのだ。

ダンはスザンナを大切にしている一方でエリク王子の事をないがしろにし、この前、城に侵入した時には警備の騎士も殺している。今回だつてここへやって来るまでに、誰かの命を奪っているかもしれない。

と、私が目を細めてダンを睨みつけている間に、新たな影がこの室内に現れていた。

大きな黒牛の頭と下半身を持っているが、首から下、腰から上の上半身だけは筋肉質な人間のもの。ひずめのついた足で2足歩行をしている。

「悪魔……」

私は小さくつぶやいた。あれはダンと契約している悪魔だ。体に秘めている魔力の量、威圧感、オーラ……すべて人間を超えていて異様だった。

しかしこれでも、おそらく下位の悪魔だろう。人間の呼び出しに応じるのは下位の悪魔が多く、運が良ければ中位のも物が来てくれるのだ。

牛の悪魔は、ざらついた野太い声を出して言った。

「今日お前にやった魔力の対価は、あの女でいい。あいつは処女だし、美味そうだ」

ぎょろりとした目は、しっかりとこちらに向けられている。面と向かって「処女だ」なんて言い当てられて、私は羞恥心から頬を赤らめた。恥ずかしさを隠すように、ダンの隣にいる悪魔を睨む。きつとミカに笑われている。

「彼女は駄目だ。ここで殺しておかないと。対価は他から連れてくる」
「殺すのは犯してからだっついていいだろう」

ダンと悪魔が話す内容を、私は嫌悪感を持って聞いていた。牛の悪魔の荒い鼻息の熱が、ここまで届いてきそうで鳥肌が立つ。

悪魔が対価に人間との交わりを要求するのは珍しいことではない。だけど私は、あの牛男の相手なんて絶対にしたくない。考えただけで寒気が走った。

「しょうがないな」

ダンがため息をつく。

私は左手に握っている魔石に魔力を込めた。

「クロエ、大人しくうちまでついて来てくれないか？　ここで死ぬよりはいいだろう？」

抑揚のない声を出すダンに、私はうなるように噛みついた。

「死んだ方がマシですよ！」

部屋に真つ白な光が満ちる。

一瞬ののち、その光が収まると、ベッドから抜け出した私の隣にはカレル副団長が立っていた。もちろん彼だけではなく、その奥には他の魔術師や騎士もそろっている。皆、杖と剣を手に、戦闘準備万端だ。

「あれが悪魔……？」

まだ若い騎士の一人が、牛男を見て息をのんだ。悪魔と対峙するのは初めてなのだろう。

一方でカレル副団長は、その契約者である黒魔術師の方を注視していた。

「どこかで見たことがあるような……」

「信じたくないですが、第3隊所属の魔術師のようです」

副団長の疑問に女の魔術師が答える。第5隊の隊長さんだ。研究棟の中で、ダンの姿を見かけていたのかもしれない。

カレル副団長が、私の方へ問いかけるような視線を向ける。

「はい。うちの隊員のダンです」

私はうなづいた。

ダンは無表情だったが、ほんのわずかに顔をしかめ、カレル副団長たちを睨みつけていた。敵が増えて焦っているというよりは、始末しなければならぬ人間が増えて面倒臭がっているような顔。

「内部犯でしたか」

カレル副団長が失望したようにそう言った瞬間、いきなり前方から青白い炎が迫ってきた。ダンの杖から放たれたそれは、大きな鳥の形をしており、私たちの方へ一直線に向かってくる。

私が防御のための術を構築するより先に、目の前に強固なシールドが現れた。淡い光を放つ、ドーム状のシールド。第1隊と第5隊の隊長たちが協力して作り出したもののようで、魔術師、騎士を問わず、味方全員を包み込んでいる。

ダンの炎鳥がぶつかってくるたび、シールドは細かく震えた。

広いといえども、ここは部屋の中。王子の寝室の壁は、炎鳥の羽根の端が擦れるたび黒く焦げ付いていく。

(ここじゃ、戦うには狭すぎる)

ダンを倒すために攻撃魔術を使っても、味方を巻き込んでしまう恐れがある。

私は悩んでいた。異空間魔術を使うか否か。この世界のどこでもない異空間を作り出し、そこで戦えないかと思っただ。

しかし異空間魔術は高度で、新米の私が使うと違和感のある術なのだ。ミカの魔力を借りれば簡単にできるけど、私がいきなり大量の魔力を操り出したら怪しまれるし。

「わっ……！」

くらりと脳が揺れたかと思うと、次の瞬間、私は広々とした草原に立っていた。隣には味方の魔術師や騎士たち、前にはダンと悪魔もいる。空は雲ひとつなく澄みきっていて、草原は遙か遠くまで続いていた。

「副団長が？」

私が聞くと、カレル副団長は「ええ」とうなづいた。ここは彼の作り出した異空間なのだ。どうやら私と同じことを考えていたらしい。

「眩しいな」

青い空を見て、ダンの隣にいる悪魔がわずらわしそうに言ったが、目を細めるだけでこの異空間を壊そうとはしない。

この戦いにおいて、彼は傍観者だった。ダんに魔力を貸しはするが、決して戦いに加わるうとはしない。ただ私たちが争うのを見て楽しんでるのだ。

まるでミカみたい。彼もきつと、この空間までついてきている。姿は見えないけれど。

しかしミカと違うところは、自分で術を繰り出してダンを援護しようとしないうところ。ミカは場合によって 私人では相手に勝てそうにない時 は、戦いに手出しして助けてくれるから。

だが悪魔としては、この牛男の行動の方が正しいのだろう。今までも何度か黒魔術師と戦ってきたけど、その相棒ともいえる悪魔は、みな傍観者だった。契約者に魔力を貸すだけ。なぜならそれが、契約の全てだから。

最近になってやっとミカの方がおかしいんだと思い始めた。まだ私が小さく、満足にお金を稼げなかった時は、ミカがどこからか食料を調達してきてくれる事もしばしばだったし。しかも対価なしで。ミカは私に幸せを与えてはくれないけれど、生きるための協力はしてくれるのだ。

なんて、私がちょっと別の事を考えているうちに、ダンはまだ新たな術を繰り出してきた。

彼の背後から、真っ黒な煙のようなものがもくもくと沸き上がっ

てくる。それはどんどんと膨張していき、こちらの陣営にまで迫ってきた。

動きはゆっくりとしているが、範囲が広い。このままではあつという間に囲まれて、飲み込まれてしまう。

「何だ、この術は？」

第1隊の隊長が目を見開いた。私もこの術の正体は分からない。魔術師は自分オリジナルの術を作り出すこともあるから、これもダンが独自に完成させた術なのかも。悪魔からもらう膨大な魔力を頼った、黒魔術師向きの術に思えた。

しかし何の術か分からないというのは危険だ。あの黒い煙に触れたらどうなる？ 吸い込んだら毒のように体を蝕むのだろうか？

迫り来る煙に危機感を持った魔術師の隊長たちが、この空間へ来る時に壊れてしまっていたシールドを、もう1度構築し始めた。さつきと同じように2人で協力して呪文を唱え始める。

その近くで、私もまた別の呪文を詠唱し始めた。

黒い煙から身を守るのにシールドは有効な手段だが、防御ばかりではダンを倒せない。

ミカの魔力を少し借りて、体内で素早く練り上げる。それは呪文に合わせて私の杖の先から放出され、ダンの黒い煙がこちらに到達するより、隊長たちのシールドが完成するより先に、力強い風となつて実体化した。頼りなく辺りをただよう黒い煙は、渦巻く烈風に太刀打ちできない。

私が杖を降ろす頃には、視界を遮る黒煙は完全に吹き飛び、消え失せていた。ダンが不満そうに眉を寄せている。

風の魔術は好きだ。使いやすいし、私に合っているのかもしれない。

「やるな」

第1隊の隊長が、片眉をクイと上げて私の方を振り返った。称賛というより、驚きを含んだ表情で。

気づけば他の人たちも目を丸くして、同じような顔でこっちを見ていた。今使った風の魔術はそれほど難しいものではないはずだが、皆、新米の私には戦いへの貢献を期待していなかったのだろう。

「よくやりました。しかし」

カレル副団長が私に話しかけた瞬間に、ダンがかぼちゃくらいの大きさの魔法弾　魔力を込めた光の玉　を放った。

副団長は素早く反応すると、同じくらいの魔法弾を作り出して相殺させる。そして言った。

「しかし、ここからは戦いも激しくなるでしょう。貴方は後方で控えていなさい」

私はその言葉に素直に従った。あまり出しゃばるべきではない。斜め前を見れば、騎士の人たちも動かずにじっと攻撃の機を伺っていた。ダンが無差別に放つ魔法弾をたまに盾で防いでいるが、それ以上前には出ない。

今はカレル副団長を筆頭にした魔術師たちの攻撃ターンで、自分たちはしゃしゃり出るべきではないとわかまえているのだ。魔術師は中距離攻撃が得意だが、騎士は近距離。やみくもにダンへ向かっていけば、魔術師たちの攻撃の邪魔になると冷静に理解している。

私は仲間と共に戦うという事に慣れていないし、こういう場面では『敵』と『自分』しか見えなくなりがちだが、騎士たちはちゃんと全体を見て状況を把握しているのだ。さすが、戦い慣れしている

のだろう。

騎士たちが沈黙を続けるなかで、黒魔術師対白魔術師の戦いは厳しさを増してゆく。

しかし、こういう互いに攻撃を仕掛けるだけの戦いは、魔力と体力を激しく消費するので、普通10分と持たずに決着がつく。今回もまたそうだった。

私は後方で戦況を見守っているだけだったが、他の白魔術師たちは皆で上手く連携して、怒濤の攻撃をダンに仕掛けた。ダンもほとんどの攻撃ははじき返していたのだが、複数人の上級魔術師を相手に戦うとなると、いくら黒魔術師といえども余裕ではられない。

攻撃と攻撃の刹那。ほんのわずかに生まれた隙を、カレル副団長は見逃さなかった。

杖の先からしなやかに伸びる光の鞭で、ダンの持っている杖を叩き落としたのだ。一瞬「しまった」というような顔をしたダンに、今度は騎士が攻めかかる。

いつの間にかダンのすぐ側まで移動していた騎士の一人が最後の1歩を踏み出し、間合いを詰めると、剣を水平に斬り出した。

「うっ……ぐ」

ダンが鈍くうめく。彼は悲鳴さえも静かだった。

緑の大地に、赤い鮮血がほとばしる。騎士の剣は、ダンの腹を真横に裂いたのだ。

即死に近い状態だったと思う。小さなうめき声と共にダンは崩れ落ち、そしてぴくりとも動かなくなつた。

最後の1撃を放った騎士の肩を、その先輩らしき騎士が褒めるように叩いた。魔術師たちも緊張を解き、息を吐く。

と、辺りの景色がぐにやりと歪み、私たちは　牛の悪魔と息絶えたダンも含め　異空間から王子の寝室へと戻ってきた。

怪我をしている者はいるものの、味方は全員無事。黒魔術師相手の戦いとしては上出来だったと思う。

ダンがまだ黒魔術師としての経験が浅かったことで、こちら側はだいぶ有利になった。ダンが悪魔と契約したのは、スザンナがエリク王子に振られた後　今から1ヶ月ほど前の事のようにだったから。

血を流すダンの遺体を前にしても、悪魔は表情を変えなかった。むしろ少し、笑っているようにも見える。

しかし、それもそのはず。

「何だ!？」

騎士の一人が声を上げた。横たわるダンの体から、銀色にぼつと光る魂が出てきたからだ。魂は、生きていた頃のダンと同じ姿形をしている。

「魂ですよ」

カレル副団長が落ち着いた声で説明した。きっと今までも、何度かこういう場面に出くわしているんだろう。

30代くらいのがつちりとした騎士が眉をよせる。

「魂? ……俺は任務で過去に人を殺したこともあるが、魂なんて出てこなかったぞ」

「おそらく、黒魔術師が死んだ時にのみ起こる現象なんでしょう。黒魔術師の魂は、悪魔に喰われる運命にありますから」

副団長が言う。

そう、それが黒魔術師の末路だ。

魂となったダンは、こちらのことが見えているのかいないのか、意識があるのか無いのか、どんよりとうつろな目をしていた。

「まだこつちに来て1ヶ月だつてのに、もう契約者が死んじゃった。運がいいのか悪いのか。魂にありつけるのは嬉しいが、もう少し人間の女と交わりたかったな」

牛の悪魔が、喜んでいようでもあり困っているようでもある声音で言った。

悪魔は自分の契約者を殺す事はできない。だから下手をすれば、魂にありつけるまでに何十年とかかる場合もある。契約者である人間が寿命を迎えるか、誰かに殺されるのを待たなくてはならないから。

しかし魂にありつけるまで何十年とかかるといことは、それだけ長い時間人間界に滞在できるといことでもある。下位、中位の悪魔は人間に召還された時だけ魔界を出られ、契約関係が終わると強制的に魔界へ返されるから。

彼らにとつて人間界はとても楽しいところらしいから、なるべく長く契約を続けたいとも思っているのだ。

魂は早く喰いたい、人間界には長くいたい。ほとんどの悪魔はそういうジレンマを抱えているらしい。

私たちがじつと注視している中、牛の悪魔がおもむろに口を開け、大きく息を吸い込んだ。

するとダンの魂が、ずらずとその口の中へ吸い込まれていく。顔の部分から形が歪み、細く引き伸ばされながら……

この光景は見ていて気分のいいものじゃない。けどもつと辛いのは、喰われていく者が叫ぶ悲鳴を聞く事だ。ダンも魂を喰われ始

の牛の悪魔と同じようなことを言っていた。想像していたより、人の魂は美味しくない。

魔界ではもしかして、『人間の魂は、喰った瞬間に恍惚感を覚えるほど美味だ』とかつて、誇張された噂が流れているのかもしれない。

なににせよ、犯人死亡で事件の幕は閉じた。黒魔術師をきっちり倒せたことは喜ばしいことだ。

しかし部屋の中には、どこか陰鬱な空気が流れていた。皆、勝利に浮かれることもなく、魂の抜けたダンの遺体を厳しい表情で見つめている。きつとまだ、あの恐ろしい叫び声が耳に残っているのだろう。私だってそうだ。数日は離れてくれそうにない。

「皆、よくやってくれました」

沈黙を破るようにして、カレル副団長が声を上げた。

「上手く連携できていましたし、上出来です。ですよね？」

副団長はそう言って、騎士側の責任者らしき男に声をかけた。彼もうなづいて仲間を褒める。とりわけ、最後の一撃を決めた若い騎士を。部屋の空気が少し和んだ。

「しかし彼の目的はなんだったのでしょうか。それを聞き出せないまま殺してしまったのは悔やまれますね。告白をうながす魔術をかける余裕もなかったですし」

顎に手を当てて言う副団長に、私はダンの目的を説明した。エリク王子の心を自分の愛する幼なじみに向けるため、ダンは王子に”恋の呪い”をかけようとしていたのだ、と。

「それ、いつ犯人から聞き出したのですか？」

「え、えっと……ダンが現れてから……副団長たちを呼ぶまでの間に……」

「犯人が現れたらすぐに呼べと、私は貴方に言いませんでしたか？」

カレル副団長に氷のように冷えきった声で注意され、私は小さく縮こまった。

「言われました。すいません」

謝ると、副団長は「全く、殺されなくてよかったですよ」と呆れたように言った。そして続ける。

「しかし一応褒めておきます。貴方は今回の立役者の一人ですからね。この作戦を提案し、おとり役をこなし、犯人の動機も上手く聞き出していた」

そこでフツと笑うと、カレル副団長は私の頭にぽんと手を乗せた。戦闘の時はほとんど後方に控えていたし、正直お褒めの言葉ももらえるとは思っていなかったから、結構嬉しい。

私はふにやりと口元をゆるめると、照れを隠すようにつつむいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1429x/>

灰色の魔術師

2011年12月24日00時50分発行